

とせず、悪人の朝に立たず、悪人  
 と言はず。悪人の朝に立ち、悪  
 人と言ふは、朝衣朝冠を以て塗  
 炭たんに坐するが如し。悪を悪むの  
 心を推すに、郷人と立つことを  
 思へ。其の冠正しからざれば、  
 望望然として之れを去り、將に  
 浼けがされんとするが若し。是故に

- 朝衣朝冠は君に朝見する時の禮服禮帽なり。
- 塗炭は泥土と木炭共に汚きものなり。
- 郷人は郷里の人なり、其の衣冠不恰好なり。
- 望々然は慙愧げんけいの形。
- 去は其處へたを去るなり。
- 浼は汗に同じ○若しは恐らくかくあるべしの意味。

諸侯其の辭命を善くして至る者  
 ありと雖も受けず。受けざるも  
 のは、是れ亦就くことを屑せつしと  
 せざるのみ。

柳下惠は汙君を羞ぢず、小官を  
 卑しとせず、進んで賢を隠さず、  
 必ず其の道を以てす、遺佚いいつせら  
 るゝも怨みず、阨窮えききゆうするも憫れんへ

- 辭命は使者の口上なり。
- 就は仕ふること○屑は潔に同じ。
- 柳下惠は魯の大夫、姓は展、名は禽、柳下に居る、惠と諡す○汙君は不徳の君○小官は低き役○隠さずは充分にはたらかすこと○遺佚は棄て、用ひられざること○阨窮は困難、苦惱すること。

ず。故に曰はく、爾は爾たり、  
 我は我たり、我が側に袒裼裸裎  
 すと雖も、爾焉んぞ能く我を沈  
 さんやと。故に由由然として之  
 れと偕にして而も自から失はず、  
 援きて之れを止むれば止まる。  
 援きて之れを止むれば止まるも  
 のは、是れ亦去ることを屑しと

- 相互に獨立獨行して、其の善を爲すべし。
- 袒裼は肩をぬき臂をあらはすこと。○裸裎ははだかになること。
- 他の者の感化を少しも受けざるなり。
- 山々然は自得する所ありて物に拘はらざる形。
- 之れとは人をさす。
- 失はずは正を失はざること。
- 援は引くこと。
- 柳下惠は去ることを善しとする者にあらず。

せざるのみ。

孟子曰はく。伯夷は隘し、柳下  
 惠は恭しからず。隘きと恭しか  
 らざるとは君子由らざるなり。  
 孟子曰はく。天の時は地の利に  
 如かず、地の利は人の和に如か  
 ず。

三里の城、七里の郭、環りて之

- 隘は度量の狭隘なること。
- 恭からずは謹直ならざること。
- 由はより所とすること。
- 天時は時節方角なり。○地利は要害堅固なること。○人和は人心の一致すること。
- 郭は外城、城の外構なり。

れを攻めて勝たず。夫れ環りて之れを攻むるに、必ず天の時を得る者あり、然り而して勝たざるものは、是れ天の時が地の利に如かざればなり。  
 城高からざるに非るなり、池深からざるに非るなり、兵革堅利ならざるにあらざるなり、米粟

○地の利あるが故に勝つざるなり。

○兵革は干戈甲冑なり。  
 ○利は銳きこと。

多からざるに非るなり。委て、之れを去るは、是れ地の利が人の和に如かざればなり。  
 故に曰はく。民を域るに封疆の界を以てせず、國を固むるに山谿の險を以てせず、天下を威すに兵革の利を以てせず。道を得る者は助多く、道を失ふ者は助

○委は委棄と熟し、うちすてること。  
 ○人心一致するが故に其の地を委てざるを得ざるなり。

○域は居住を制限すること○封疆は土を盛りて國境とする所○界は分界又は制限○以てせずとは禁制することなきをいふ○谿は深き谷○險は險阻けはしき所なり○威は壓制すること○利は銳利なり○道は人和の道なり。  
 ○助はいろいろの胎助なり。

寡し。助寡きの至りは親戚之れに畔き、助多きの至りは天下之れに順ふと。

天下の順ふ所を以て親戚の畔く所を攻む、故に君子は戦はざることあり、戦へば必ず勝つ。」

孟子將に王に朝せんとす。

王人をして來らしめて曰はく。

○有道を以て無道を攻む、故に戦はずして事治まるをうれども、若し戦ふに及んでは必ず勝つものなり。

○王は齊王なり。

寡人まさに就いて見んとする者なり。寒疾あり、以て風すべからず。朝せば將に朝を視んとす。識らず寡人をして見ることを得しむべきか。

孟子對へて曰はく。不幸にして疾あり、朝に造ること能はず。明日出で、東郭氏を弔ふ。

○就は孟子の宿處に行くこと。

○寒疾は風邪なり。

○風は外に出て風にあたること。

○朝せばは孟子が朝廷に出て來たならばの意味○朝を視んは王自身が疾を力めて朝廷に出ること○見るは孟子に會見すること。

○孟子王の不熱心を知りて又相當の挨拶を爲せり

○造は至なり。

○東郭氏は齊の大夫の家なり。

公孫丑曰はく。昔は辭するに病を以てして、今日は弔ふ、或は不可ならんか。

曰はく。昔は疾み、今日は愈ゆ。いかんぞ弔はざらん。

王人をして疾を問ひ醫をして來らしむ。

孟仲子對へて曰はく。昔は王

○昔は此にては昨日なり。  
○辭は出て、面會することをほりたること。

○或は疑ひの辭なり。

○愈ゆは癒に同じ、なほりたること。

○孟子をたづねしめたるなり。

○孟仲子は孟子の從兄弟にして孟

命ありしも、采薪の憂ありて、朝に造ること能はず。今病小しく愈ゆ、趨つて朝に造れり、我れは能く至るや否やを識らず。

數人をして路に要せしめて曰はく。請ふ、必ず歸ることなくして、朝に造れ。

子に學べる者なり ○采薪の憂は病のためいつもの通り薪を取ることに能はざるをいふ、つまり謙遜の辭なり ○趨り造るは孟子についていふ ○孟仲子は孟子のためにとりつくろひて辯解したるなり。

○要するはまちふせておくこと。

已むを得ずして景丑氏に之きて宿せり。

景子曰はく。内は則ち父子、外は則ち君臣、人の大倫なり。父子は恩を主とし、君臣は敬を主とす。丑は王の子を敬するを見る、未だ以て王を敬する所を見ず。

○景丑氏は齊の大夫にして學才あり。

○大倫は最も大切なるすぢみちなり。

○恩はなさけなり、愛の如し。

○丑は景子の名。

○子は孟子をさす。

○見ずとは孟子についていへるなり。

曰はく。惡是れ何の言ぞや。齊人仁義を以て王と言ふ者なし、豈仁義を以て美しからずと爲さんや、其の心に曰はく、是れ何ぞ興に仁義を言ふに足らんやといふのみ、則ち不敬是れより大なるはなし。我は堯舜の道に非ずんば敢て王の前に陳べず、故

○興には王と共にあり。

○堯舜の道を以て王に見え王に説かんとするが故に自分の方途に王を敬するの意ありとなり。

に齊人我が王を敬するに如くはなし。

景子曰はく。否、此の謂に非るなり。禮に曰はく、父召さば諾なし、君命じて召さば駕を俟たずと。固より將に朝せんとするや、王命を聞いて遂に果さず、宜しく夫の禮と相

○諾なしははいと返辭をするまでもなくすぐと行くこと。  
○命は使者にいひつけること○駕を俟たずは迎ひにくる所の駕をまたずいそいで行くこと。

似ざるが若く然るべし。

曰はく。豈是を謂はんや。曾子曰はく、晋楚の富は及ぶべからざるなり、彼は其の富を以てし、我は吾が仁を以てす、彼は其の爵を以てし、我は吾が義を以てす、吾何ぞ嫌らんやと。夫れ豈不義を曾子之れ言はんや。是れ

○若く然るべしとはそのようであるとの意味。

○嫌るは満足すること。

或は一道ならん。

天下に達尊三あり、爵は一、齒は一、徳は一なり。朝廷は爵に如くはなく、郷黨は齒に如くはなく、世を輔<sup>たす</sup>け民に長たるは徳に如くはなし。惡<sup>いづく</sup>んぞ其の一を有<sup>た</sup>ちて其の二を慢<sup>あなど</sup>るを得んや。故に將に大いに爲すあらんとす

○一道ならんとは一種の道理があることならんとの意味。

○達尊はすべてに行き渡りて尊きもの

○齒は年齢なり、よはひとよむ

○三者場合によつて各々尊きものなり。

○郷黨は邑里なり。

るの君は、必ず召さざる所の臣あり、謀るあらんと欲すれば則ち之れに就く、其徳を尊び道を樂む、是の如くならずんば與<sup>とも</sup>に爲すあるに足らざるなり。故に湯の伊尹における、學びて而る後に之れを臣とす、故に勞せずして王たり。桓公の管仲における、

○就くは召寄せずして親ら行い問はるゝなり。

○學びては其下に赴きて學び習はれたるなり。



學びて而る後に之れを臣とす、故に勞せずして霸たり。今天下地醜しく、德齊しく、能く相尙ふることなし、他なし、其の教ふる所を臣とすることを好みて、而して其の教を受くる所を臣とするを好まざればなり。湯の伊尹における、桓公の管仲における

○天下は天下の諸侯をいふ。  
○醜は類似すること。  
○尙は加又は過にして起え勝れること。  
○徒らに氣位のみ高くて能く賢人に問ひ賢人を敬ふの美德なきをいふ。

るは、則ち敢て召さず、管仲すら且つ召すべからず、而るを況んや管仲たらざる者をや。」

陳臻問うて曰はく。前日齊に於て王兼金一百を餽りしも受けず、宋に於て七十鎰を餽りしに受け、薛に於て五十鎰を餽りしに受けたり。前日の受

○管仲たらざる者は管仲以上の者をいふ。  
○以上孟子が齊王の召に應せざる理由を明かにせるなり。

○陳臻は孟子の弟子、齊の人なり。  
○兼金は其價兼ね倍するほどの好き金なり○一百は一百鎰(一鎰は二十兩)○餽は贈に同じ。

けざりしと是ならば則ち今日の受けたるは非なり。今日の受けたることは是ならば則ち前日の受けざりしこと非なり。

夫子必ず此に一に居らむ。

孟子曰はく。皆是なり。宋に在るに當つては予將に遠く行くことあらんとす、行く者は必ず臚

○一に居らむとはどちらか一方によつてをられうとの意味。

○臚は行く者を送るために贈る物をいふ。

を以てす、辭に曰はく、臚を餽ると、予何爲れぞ受けざらむ。薛に在るに當つては予戒むる心あり、辭に曰はく、戒を聞く、故に兵のために之れを餽ると、予何爲れぞ受けざらむ。齊におけるが若きは、則ち未だ處することあらざるなり、處するなくして

○戒むる心は不意の變難に備ふる警戒の心なり。

○兵は兵備の費用をいふ。

○處はこれといふきまつた用事なり。

之れに餽る、是れ之れを貨たからとす  
るなり。焉いづんぞ君子にして貨を  
以て取るべきことあらんや。」

孟子平陸に之ゆく。其の大夫に謂  
つて曰はく。子の持戟ひきの士一日  
にして三たび伍を失はゞ、則ち  
之れを去るや否や。

曰はく。三たびを待たず。

○貨は財寶なるが其の意味は賄賂ワイロ、  
まひなひなり。

○平陸は齊の西邊にある邑の名。

○持戟の士は守衛の士なり戟はほ  
こ、戈の單枝なるに對しこれは雙枝  
なり○伍は行列。

○待たずは三度たゝぬうちに去る  
こと。

然らば則ち子の伍を失ふこと亦  
多し。凶年饑歲には、子の民、  
老羸さいは溝壑ぐうに轉じ、壯者は散じ  
て四方に之ゆく者幾千人ぞ。

曰はく。此れ距心の罪に非る  
なり。

曰はく。今人の牛羊を受けて之  
れがために之れを牧する者あら

○大夫自身が行列を失ひ職務を失  
ふことをいふ。

○羸は衰弱せる者、つかるとよむ。  
○轉はころげおちて死すること。

○距心は大夫の名。

○牧するは養ふこと。

ば、則ち必ず之れがために牧と芻とを求めむ。牧と芻とを求めて得ざれば、則ちこれを其の人に反さんか、抑も亦立つて其の死を視るか。

曰はく。此れ距心の罪なり。

他日王に見えて曰はく。王の都を爲むる者、臣五人を知る。其

○牧は牧場○芻はかりくさ又はまぐさ。

○其の人は興へたる人なり。

○其の死は牛羊の死なり。

○大夫反省して、遂に其罪を自覺せり。

○都は先君の廟ある處、諸侯の封ぜられたる邑、又は卿大夫の采邑、知行處をいふ。

の罪を知る者は惟孔距心のみ、王のために之れを誦す。

王曰はく。此れ則ち寡人の罪なり。」

孟子軻鼈に謂つて曰はく。子の靈丘を辭して士師を請ふは、似たり、其の以て言ふべきがためなり。今既に數月、未だ以て言

○孔は平陸の大夫の姓。

○誦は申上げること。

○大夫中正直なる者唯一人なるをばちていへるなり。

○軻鼈は齊の大夫○靈丘は齊の邊鄙の邑○士師は獄官の長○似たりは理あるに似たりとの意味○言ふとは王に忠諫を爲すこと。

ふべからざるか。

蚺鼃王に諫む、而も用ひられず、臣たるを致して去れり。」

齊人曰はく。蚺鼃の爲めにする所以は則ち善し、自から爲めにする所以は則ち吾知らざるなり。

公都子以て告ぐ。

○致すは還すこと、辭退なり。

○孟子を非難せる語なり。

○自ら爲にすとは自分のために謀ること、道行はれざるもまだ齊に止まりて去らざるわけがわからぬとなり。

○公都子は孟子の弟子。

曰はく。吾之れを聞く、官守ある者は其の職を得ざれば則ち去る、言責ある者は其の言を得ざれば則ち去ると。我には官守なく、我には言責なければ、則ち吾が進退豈綽綽然として餘裕あらざらんや。」

孟子齊に卿たり、出で、滕に弔

○官守は官を以て守とすること、役人なり。

○言責は言を以て責とすること、諫士なり。

○綽々然は寛やかなる形。

○餘裕はゆつたりとしてゐること。

○進退の自由自在なるをいふ。

○滕の君の喪を弔へるなり。

ふ。

王、蓋の大夫王驪をして輔行  
たらしむ。

王驪朝暮に見ゆ、齊滕の路を  
反つて、未だ嘗て之れと行事  
を言はず。

公孫丑曰はく。齊卿の位は小  
なりとせず、齊滕の路は近しと

○蓋は齊の下邑なり○王驪、字は子  
放、宣王の嬖臣○輔行は副使なり。

○孟子王驪の人物の卑下なるをい  
やしてみて相談せざるなり。

せず、之れを反つて未だ嘗て之  
れと行事を言はざるは何ぞや。

曰はく。夫れ既に之れを治むる  
あり、予何をか言はんや。」

孟子齊より魯に葬り、齊に反つ  
て贏に止まる。

充虞請うて曰はく。前日虞の  
不肖を知らず、虞をして匠を

○夫は王驪をさす、彼獨りて事を處  
置せるをいふ。

○葬は、母齊に歿せしも、魯は祖先墳  
墓の地なるが故にわざく魯に至  
つて葬りしなり○贏は齊の南邊に  
ある邑。

○充虞は孟子の弟子。

○匠は棺槨を造ること。

敦くせしむ、事嚴なり、虞敢て請はず。今願はくば竊かに請あり、木は以だ美はしきが若く然り。

曰はく。古は棺椁度なし、中古は棺七寸、椁之れに稱ふ、天子より庶人に達す。直觀の美はしきが爲のみに非るなり、然る後人

○敦は鄭重にすること○事嚴は事の急なりしこと。

○若く然りは左様と思はるゝとなり。

○度はきまり。

○稱は相當すること。

○觀は外見なり。

の心を盡す。得ざれば以て悦を爲すべからず、財なければ以て悦を爲すべからず。之れを得て財ありと爲さば、古の人皆之れを用ふ。吾何爲れぞ獨り然らざらむ。且つ化者の比めに土をして膚に親づかしむるなきは、人心に於て獨り咬きことなからん

○盡すはせい一ぱいつとむること。○得ざるは禮法通りにゆかぬこと。○財なしとは棺椁を造る資力なきこと。○得ては禮法にかなふこと。

○用ふは取り行ふこと。

○化者は死者をいふ。

○親かしめざるは棺椁を美にすることといふ。

○咬は快に同じ。

や。

吾之れを聞けり、君子は天下を以て其の親を儉せずと。』

燕人畔く。

王曰はく。吾甚だ孟子に慙づ。

陳賈曰はく。王患ふることな

かれ。王自みづかから周公と孰いづれか

仁且つ智なりと以もて爲なへるか。

○天下を以てとは天下のために財物を愛惜すること。

○儉せずは親の葬儀を節約にせざること。

○畔は齊に反したるなり。

○王は宣王。

○陳賈は齊の大夫。

曰はく。あゝ是れ何の言ことばぞや。』

曰はく。周公管叔をして股を

監せしむ。管叔股を以て畔く。

知つて之れをせしむるは是れ

不仁なり、知らずして之れを

せしむるは是れ不智なり。仁

且つ智は周公すら未だ之れを

盡つくさず、而いはるを況いはんや王に於

○管叔、名は鮮、武王の弟にして周公の兄なり。

○監はみはりしてとりしまること。



てをや。賈請ふ見て之れを解とかむ。

孟子を見て曰はく。周公は何人ぞや。

曰はく。古の聖人なり。

曰はく。管叔をして殷を管せしむ、管叔殷を以て畔そむくと、これありや。

○見は孟子に面會すること。  
○解はきくわけ又はさとること、つまり疑をなくすること。

曰はく。然り。

曰はく。周公其の將に畔かんとするを知りて之れをせしめたるか。

曰はく。知らず。

然らば則ち聖人も且つ過あやまちあるか。

曰はく。周公は弟なり、管叔は

○弟は兄に敬事し、信賴す、なんぞ此

兄なり、周公の過ちも亦宜ならずや。

且つ古の君子は過てば則ち之れを改む、今の君子は過てば則ち之れに順ふ。古の君子は其の過ちや、日月の食の如し、民皆之れを見る、其の更むるに及んでは民皆之れを仰ぐ。今の君子は

の如きことを考ふるの餘地あらんや。

○日食月食の如く、非常に目立つをいふ。

○更は本に復すること。

豈徒之れに順ふのみならんや、又従つて之れが辭を爲る。」

孟子臣たることを致して歸る。

王就いて孟子を見て曰はく。

前日見ることを願うて得べからず、同朝に侍するを得て甚だ喜ぶ。今又寡人を棄て、歸る。識らず以て此を繼いで見

○辭は辨解のことばなり。

○辭職なり。

○王は齊の宣王なり。

○就は孟子の宿處につくこと。

○繼いで以後も引續きての意味。

ることを得べきか。

對へて曰はく。敢て請はざるのみ、固より願ふ所なり。

他日王、時子に謂つて曰はく。

我中國にして孟子に室を授け、

弟子を養ふに萬鍾を以てし、

諸大夫國人をして皆矜式する

あらしめんと欲す。子盍ぞ我

○敢て請はずは別段に口に出して請はずとの意味。

○時子は齊の臣なり。

○中國は齊國の中央の處。室は居室。

○鍾は六斛四斗。

○矜式は敬ひ法ること。

のために之れを言はざる。

時子陳子に因つて以て孟子に

告ぐ。

陳子時子の言を以て孟子に告

ぐ。

孟子曰はく。然り、夫れ時子は惡んぞ其の不可を知らんや。如し予をして富を欲せしめば、十

○陳子は孟子の弟子陳臻なり。

○然りはたゞ應答の辭のみ。

萬を辭して萬を受くる、是れ富を欲すと爲すか。

季孫曰はく、異なるかな子叔疑己れをして政を爲さしむ、用ひられざれば則ち亦已む、又其の子弟をして卿たらしむ。人も亦孰か富貴を欲せざらん、而して獨り富貴の中に於て龍斷を私す

○十萬鍾は卿の俸祿なり、孟子既に卿を辭したるなり。

○富を欲せざるを明す。

○季孫、子叔疑共に何人なるや明かならず○異はあやしとの意味。

○己れは卿を辭して、更に子弟をして卿たらしむるなり。

○龍斷は岡壘の斷じて高き所○私  
は自分の徒にて占有すること。

るありと。

古の市を爲す者は其の有る所を以て其の無き所に易ふ。有司の者之れを治むるのみ。賤丈夫あり、必ず龍斷を求めて之れに登り、以て左右に望みて市の利を罔す、人皆以て賤と爲す、故に従つて之れを征す。商を征

○市はすべて市場なり。

○征は上より税を取り立てること  
○商は商人なり。

することは此の賤丈夫より始まる。」

孟子齊を去つて晝に宿す。王のために行くを留めんと欲する者あり、坐して言ふも應ぜず、几に隠つて臥す。

客悦ばずして曰はく。弟子齊宿して而る後敢て言ふも、夫

○晝は齊の西南にある近き邑。

○几はこしかけなり。

○隠は倚に同じ、よしかゝること。

○弟子は客自身ないふ○齊宿は齋戒(身を清めること)して一夜を越したること。

子臥して聽かず、請ふ復敢て見るなこと勿ならん。

曰はく。坐せよ。我明かに子に語つげむ。昔し魯の繆公ぼく、子思の側かたはらに人なければ則ち子思を安んずること能はず。泄柳申詳は繆公の側に人なければ則ち其の身を安んずること能はず。子長者

○繆公子思(孔子の孫、名は汲)を尊敬し常に人を使はして伺候せしめたり。

○泄柳、申詳共に魯の賢人、繆公に仕べり、申詳は孔子の弟子、子張の子なりといふ○人なしとは子思の如き賢人が王の左右に在りて善言を勸むるなきをいふ○長者は孟子をさ

のために慮おもんばかつて、而も子思に及ばず。子長者を絶たつか、長者子を絶たつか。」

孟子齊を去る。

尹士人に語つて曰はく。王の以て湯武たるべからざることを識らざるは不明なり、其の不可なるを識つて然も且つ至

す○慮るは大切に取扱ふこと。  
○お前の方から伺候の禮を盡さずして絶ち棄てるものであらうと戒めたるなり。

○尹士は齊の人。  
○王は宣王なり。  
○湯武は湯王と武王なり。  
○識らざるは孟子が知らざるなり。  
○然も且つはそれでもなほといふが如し。

るは則ち是れ澤を干もとむるなり。千里にして王を見る、遇あはざるが故に去る。三宿して後に晝を出づ、是れ何ぞ濡滞じゆたいなるや。士は則ち茲こゝれ悦ばず。高子以て告ぐ。

曰はく。夫れ尹士いんし惡いづくんぞ予を知らんや。千里にして王を見る、

○澤を干むは王の光澤オカゲを受くることを求むるなり。  
○遇はずは意見の合はざること。  
○三宿は三夜宿泊せること。  
○晝は地名○濡滞は遅留じゆたい、ぐづしてゐること。  
○士は尹士の名。  
○茲は此事といふに同じ。  
○高子は孟子の弟子、齊の人。

是れ予が欲する所なり、遇はざるが故に去る、豈予が欲する所ならんや、予已むを得ざるなり。予三宿して晝を出づ、予の心に於て猶ほ以て速かなりとなす。王庶幾はくば之れを改めむ。王如しこれを改むれば則ち必ず予を反さむ。夫れ晝を出でて而も

に依つて王道を行はんとを欲するなり。

○三宿も以て速かなりと爲すは、其間に王をして反省せしめて孟子の説に合はんことを希望すればなり。

王予を追はざるなり。予然る後浩然として歸る志あり。予然りと雖も豈王を捨てんや。王由ほ用ひて善を爲すに足り、王如し予を用ふれば、則ち豈徒齊の民安きのみならんや、天下の民舉安からむ。王庶幾はくば之れを改めよ、予日に之れを望む。予

○浩然はかれこれ思ふ心のなかつた有様なり、水の遠くに流るゝが如し。

○歸り去る心ありといへども、余く王を棄てたるにあらず、猶ほ切に王

豈是の小丈夫の若く然らんや。  
 其の君を諫めて受けられずんば  
 則ち怒り、悻悻然として其の面  
 を見る。去れば則ち日の力を窮  
 めて後に宿せんや。  
 尹士之れを聞いて曰はく。士  
 は誠に小人なり。  
 孟子齊を去る。

の反省を望んで已まざるなり、孟子  
 が王道を行はんとするの意誠に厚  
 しといふべし。

○悻々然は頑固なる形。

○此語は日の暮るゝを待たずして  
 早速に立ち去ることをいふ。

○士は尹士の名。

○孟子の語に感服したるなり。

充虞路にして問うて曰はく。

夫子不豫の色あるが若く然り。

前日虞これを夫子に聞けり、

曰はく、君子は天を怨みず人  
 を尤めずと。

曰はく。彼も一時なり、此も一時  
 なり。五百年必ず王者興るあら  
 ん、其の間必ず名世の者あり。

○路は途中なり。

○不豫は不快に同じ。

○君子は怨みず尤めざる故不快の  
 顔色なきはづなりと考へたり。

○昔も今も皆時節によるとの意味。

○名世は一世に徳望の高く聞えた  
 る人。



周よりこのかた七百有餘歳、其の數を以てせば則ち過ぎたり、其時を以て之れを考ふれば則ち可なり。

夫れ天未だ天下を平治するを欲せざるなり。如し天下を平治せんと欲せば、今の世に當り、我を舍いて其れ誰ぞや。吾何爲れ

○可なりは名世の者の出で、宜しき時節なりとの意味。

○孟子の自信自重誠に敬服にたへたり。

ぞ不豫ならんや。」

孟子齊を去つて休に居る。

公孫丑問うて曰はく。仕へて

而も祿を受けざるは古の道か。

曰はく。非なり。崇に於て吾王を見ることを得たり、退いて去る志あり、變ずるを欲せず、故に受けざるなり。繼いて師命あ

○休は地名。

○孟子齊にありし時祿を受けざりしわけを疑ひ問へるなり。

○崇は地名、孟子が始めて齊の宣王に見えし處なり。

○變ずるは去る志をかへざること。

○受けざるは祿をうけざること。

○師命は師旅(軍隊)を出すの命令、即

り、以て請ふべからず。齊に久しきは我が志に非るなり。」

滕の文公世子たりしとき、將に楚に之かんとす、宋を過りて孟子を見る。

孟子性善を道ふ、言へば必ず堯舜を稱す。

世子楚より反り、復孟子を見

ち戦争の起りしこと○請ふは去ることを請ふなり。

○世子は世を嗣ぐ人、天子にあつては太子、諸侯にあつては世子といふ。

○性善を道ふは人の性は本來善なるを主張するなり。

○堯舜を稱すは堯舜の徳政を讃嘆すること。

○孟子の説實に此二句に至極す。

る。

孟子曰はく。世子吾が言を疑ふか、夫れ道は一のみ。

成颯齊の景公に謂つて曰はく、彼も丈夫たり、我も丈夫なり、吾何ぞ彼を畏れんやと。

顔淵曰はく、舜は何人ぞや、予は何人ぞやと。爲す有る者は亦

○古往今來、いかなる場合に於ても守るべき道理は唯一なり。

○成颯は齊の人。

○彼は古の聖賢をさす。

○丈夫は立派なる男子をいふ。

○舜も人なり、予も人なりとの意味。

○爲す有るとは志をしつかり立ててなること。

是の若し。

公明儀曰はく。文王は我が師なり、周公豈我を欺かんやと。

今滕は長を絶ちて短を補ふ。將に五十里ならんとす、猶ほ以て善を爲すべきの國なり。

書に曰はく。若し藥瞑眩せずんば厥の疾瘳えずと。」

○公明儀は魯の賢人、公明は姓、儀は名なり○文王は我師なりの語は周公の言なり○欺かんやは公明儀も亦周公によつて文王を師とす、決して誤りなしとの意味、深く周公を信じなれり、欺くはだますこと。  
○滕の世子を奮發興起せしむるなり。

○書は書經の商書說命篇。

○瞑眩は目がくらむほどによくきくこと。

○瘳は癒に同じ。

滕の定公薨す。

世子然友に謂つて曰はく。昔し孟子嘗て我と宋に言へり、心に於て終に忘れず、今や不幸にして大故に至る。吾子をして孟子に問はしめ、然る後事を行はんと欲す。然友鄒に之きて孟子に問ふ。

○世子は文公なり。  
○然友は文公の侍臣なり。

○大故は父君の喪をいふ、故はわざはひなり。

○事は喪祭の禮をいふ。

○鄒は孟子の郷國なり。

孟子曰はく。亦善からずや。親の喪は固より自から盡す所なり。曾子曰はく、生くるや之れに事ふるに禮を以てし、死するや之れを葬むるに禮を以てし、之れを祭るに禮を以てするは孝と謂ふべしと。諸侯の禮は吾未だ之れを學ばず。

○盡すは心情をあらはしつくして、充分に謹慎すること。

然りと雖も吾嘗て之れを聞けり、三年の喪、齊疏の服、飢粥の食は、天子より庶人に達す、三代之れを共にすと。

○三年の喪は三年間(生れて父母の懷に在る間)内にこもりおて、悲哀の情をあらはすなり○齊疏の服はしるき粗末のきもの、素服といふ○飢粥は共にかゆなり○三代は夏殷周なり。

然友反命す。

○反命は復命に同じ返答を申上ぐるここと。

定めて三年の喪を爲す。

父兄百官皆欲せず。曰はく、吾が宗國魯の先君之れを行ふ

○宗國は本國なり、滕は魯と共に文王の後なれども、魯は周公を祖とし、

ことなし、吾が先君も亦之れを行ふことなし、子の身に至つて之れに反するは不可なり。且つ志に曰はく、喪祭は先祖に従ふと。

曰はく。吾之れを受くる所あるなり。

然友に謂つて曰はく。吾他日

○ 膝は其弟叔繻を祖とす、故に魯を崇んでしかいへり。

○ 子は世子をさす。

○ 志は記録をいふ。

○ 世子の言なり。

○ 受るは三年の喪を爲すに據り所あるをいふ。

未だ嘗て學問せず、好んで馬を馳せ劔を試めり。今や父兄百官我を足れりとせず、恐らくは其れ大事に盡す能はざらん。子我がために孟子に問へ。然友復鄒に之きて孟子に問ふ。孟子曰はく。然り、以て他に求むべからざるものなり。

○ 大事は喪祭の大禮をいふ。

○ 他に求むべからずとは世子のいはるゝ通り自身に省み求むべしとなり。

孔子曰はく、君薨すれば、冢宰カウサイに聴き、粥カホを歎サり、面深墨カハシんぼくたり、位に即ツきて哭クす、百官有司政て哀カガシまざるはなしと。之れを先サキんずればなり。

上好むものあれば下必ずこれより甚シしきものあり。君子の徳は風なり、小人の徳は草なり、草

- 冢宰は宰相。
- 聴は政を委任すること。
- 深墨は憂色なり。

○先んずるは百官百姓に先んじて喪を守るをいふ。

○甚しは上よりも層一層好むこと。

之れに風を上ウふれば必ず偃ユす。是れ世子に在り。

○世子は風となりて先づ善事を行ふべしとなり。

然友反命す。

世子曰はく。然り、是れ誠に我に在り。

五ヶ月廬イロに居る、未だ命戒あらず。百官族人可謂ミナつて曰はく、知れりと。

○廬はいほり、極めて粗末なるかりやなり、又倚廬イロといふ○命戒あらずは命令教戒を出さざること○族人は一族の人々をいふ○知れりは合點せること。

葬に至るに及んで四方來つて  
 之れを觀る、顔色の戚み、哭  
 泣の哀み、弔ふ者大いに悦ぶ。  
 滕の文公國を爲めんことを問  
 ふ。

孟子曰はく民の事は緩うすべか  
 らず。

詩に云ふ、晝は爾于きて茅かれ、

○人皆世子の孝行に感動せるなり  
 ○孟子の教誡に申れり。

○民事は農事なり。  
 ○緩は怠慢なること。

○此詩は詩經幽風七月の篇。

宵は爾索綯へ、亟かに其れ屋に  
 乗せよ、其れ始めて百穀を播か  
 むと。

民の道たるや、恒産ある者は恒  
 心あり、恒産なき者は恒心なし。  
 苟くも恒心なければ、放辟邪侈、  
 爲さざるなきのみ。罪に陥るに  
 及んで然る後従つて之れを刑す、

○乗せは茅を以て蓋ひ、索を以て固  
 むること○始めては來春早々の意  
 味○播かむは種蒔にて忙はしけれ  
 ばなりとの意味。

○此一段前(四七頁)に出づ。

是れ民を罔あみするなり。焉いづんぞ仁人位あみに在るあらば、民を罔あみすること、それ爲すべけんや。

是故このに賢君は必ず恭儉にして、下を禮し、民に取るに制あり。

陽虎曰はく、富を爲さば仁ならず、仁を爲さば富まずと。

夏后氏は五十にして貢し、殷人

○恭は禮に當る○下は臣下なり○取るに制ありは税を取ることについまやかなること、是れ即ち儉なり。

○陽虎は陽貨、魯の季氏の家臣にして、富を好み、政を専らにしたる者なり。

○五十は一夫の税五十畝につき五

は七十にして助し、周人は百畝にして徹す、其の實は皆什一なり。徹とは徹なり、助とは藉しやなり。

龍子曰はく、地を治むるは助より善きはなく、貢より善からざるはなしと。貢は數歲の中を校くわべて以て常と爲す。樂歲らくには粒りゅう

○龍子は古の賢人。

○校は比較して平均すること。

○常は定例とすること。  
○樂歲は豊年。



米狼戾す、多く之れを取つて虐と爲さざれば則ち寡く之れを取る。凶年には其の田に糞ふて足らざれば則ち必ず取り盈つ。民の父母となりて、民をして盼盼然として將終歳勤動して以て其の父母を養ふを得ざらしめ、又稱貸して之れを益し、老稚をし

○狼戾は地上に散亂すること。  
○虐と爲さざれば人民が暴虐の主とせざることを。

○いつても同様に取るも、豊年には少く取り、凶年に多く取る割合となるなり。

○盼々然は恨めしうに視ること。

○終歳は一年中なり。

○稱貸は利息を取つて貸付くこと、稱は擧ぐること○稚は幼児。

て溝壑に轉ぜしむ、悪んぞ其れ民の父母たるに在らんや。

○轉は轉死なり。

夫れ祿を世くにすることは滕固

○此詩は詩經小雅大田の篇。

より之れを行へり。詩に云ふ、我が公田に雨ふり、遂に我が私に

○公田を主としていへるなり。

及べと。惟公田ありとなす。此に由つて之れを觀れば周と雖も亦助す。

○公田を立て、八家協力之れを耕し以て公家を助くるの制、是れ井田法にして又助法なり。

庠序學校を設け爲し、以て之れを教ふ。庠とは養なり、校とは教なり、序とは射なり。夏には校と曰ひ、殷には序と曰ひ、周には庠と曰ふ、學は則ち三代之れを共にす、皆人倫を明かにする所以なり。人倫上に明かなれば、小民下に親しむ。王者起る

あらば必ず來つて法を取らむ、是れ王者の師たるなり。

詩に云ふ、周は舊邦なりと雖も、其の命維れ新なりと。文王の謂なり。子力めて之れを行はゞ、亦以て子の國を新にせむ。

畢戦をして井地を問はしむ。

孟子曰はく。子の君將に仁政を

○法を取らむは人民を教養する方法を膝に見習ふべしとなり。

○此詩は詩經大雅文王の篇。

○命は天命を受けて天下に王たるをいふ。

○維新はまだあらたらしきをいふ。

○畢戦は膝の臣○井地は井田法なり。

○子は畢戦をさす。

行はんとす、えら選ちび擇らんで子を使せむ、子必ず之れを勉めよ。夫れ仁政は必ず經界けいがいより始む、經界正しからざれば井地均しからず、穀祿平かならず。是故このに暴君汗吏は必ず其の經界を慢ゆるせにす。經界既に正しければ、田を分ち祿を制すること、坐まながら定む

○經界は土地のさかひをいふ。

○制はわけまいをすること。

べきなり。

夫れ滕は壤地じょうち褊へん小なれども、將かた君子たり、將かた野人たり、君子なければ野人を治むるなく、野人なければ君子を養ふことなし。

○壤は土 ○褊はかたよりせまきこと。  
○君子は仕ふる者。  
○野人は耕す者。

請ふ、野は九一にして助のごとくし、國中の仕が一は自よつて賦

○九一は井の形に九分して其中央の一分を公田として耕すなり、即ち公家を助くること、なるなり ○國中の仕が一は國內園廩の税十分の一を取立てること ○自つては舊制

せしめむ。

郷より以下は、必ず圭田あり、

圭田五十畝、餘夫は二十五畝な

り。

死徒は郷を出づるなく、郷田同

井は出入相友ひ、守望相助け、

疾病相扶持すれば、則ち百姓

睦す。

十分の一に従ふこと。

○圭田は祭祀に供する田なり。圭は潔の意味○餘夫は老少餘力ある者に對して與ふる田なり。

○死は死人を葬ること○徒はうつるとよみ土を換え居を移すと○郷田は同郷の田○同井は井を同じうする家○守望は盜賊のために豫め警戒又視察すること○扶持はたすけ合ふこと○睦はむつまじきこと。

方里にして井す、井は九百畝、

其の中を公田と爲す。八家は皆

百畝を私して、同じく公田を養

ふ。公事畢り、然る後敢て私事

を治む、野人を別つ所以なり。」

此れ其の大略なり、若し夫れ之

れを潤澤するは、則ち君と子と

に在り。」

○方里は四方一里の地○井は九畝に分つこと○中は中央の一百畝を上田とす○私は自身の所有なり○公事を先にす。

○別つは君子と別つこと。

○潤澤はいろつやを付けて立派にすること。

神農の言を爲す者許行あり、楚より滕に之き、門に踵りて文公に告げて曰はく。遠方の人、君仁政を行ふと聞く、願はくば一廛を受けて氓とならむ。

文公之れに處を與ふ。其の徒數十人、皆褐を衣て、

○神農は上古の天子、三皇(伏羲、神農、黃帝)の一なり○言は人皆自ら耕して自ら食ふべしといふ教なり○許行は人の名○踵は至に同じ。

○廛は一夫の居處なり、みせとよむ。

○褐は粗末なる毛布。

屨を拊ち、席を織りて、以て食を爲す。

陳良の徒陳相其の弟辛と耒耜を負ふて宋より滕に之く。曰はく。聞く君聖人の政を行ふと、是れ亦聖人なり、願はくば聖人の氓とならむ。陳相許行を見て大いに悦び、

○拊はうちたしきて固めること。○自ら食物をつくるなり。

○陳良は楚の學者○徒はともがら、門人なり○耒耜は共にすき、耒は曲れるもの、耜は直なるもの。

○聖人の政を行ふ者も亦聖人なり。

盡く其の學を棄て、學ぶ。

陳相孟子を見、許行の言を道つて曰はく。滕の君は則ち誠に賢君なり、然りと雖も未だ道を聞かず。賢者は民と並び耕して食ひ、饗飧して治む。今や滕倉廩府庫あれば、則ち民を厲ましめて以て自から養

- 饗は朝食、飧は夕食、自ら食事を作ること、支那は古より日に二食なり
- 治は民事についていふ。
- 厲は苦勞すること、○自ら養ふは君が自分の養にすること。

ふなり、悪んぞ賢を得ん。

孟子曰はく。許子は必ず粟を種えて而る後に食するか。

曰はく。然り。

許子は必ず布を織りて而る後に衣るか。

曰はく。否、許子は褐を衣たり。

許子は冠するか。

曰はく。冠す。

曰はく。奚なほを冠するか。

曰はく。素を冠す。

曰はく。自から之れを織るか。

曰はく。否、粟を以て之れに

易かふ。

曰はく。許子は奚なんす爲れぞ自みづから

○素はしろきもの。

○易は交換なり。既に自ら造らざるものあるを示す。

織らざる。

曰はく。耕すに害あり。

曰はく。許子は釜ふ甑さうを以て爨かぎ

鐵を以て耕すか。

曰はく。然り。

自みづから之れを爲つくるか。

曰はく。否、粟を以て之れに

易かふ。

○甑はこしき瓦の如く土を焼きて造る飯をかしく器物なり。  
○鐵は犁レイからすきをいふ、鐵にて造ればなり。

○又交換せり。

粟を以て械器に易ふることは、  
 陶冶を厲ましむと爲さず、陶冶  
 も亦其の械器を以て粟に易ふる  
 ことは、豈農夫を厲ましむと爲  
 さんや。且つ許子何ぞ陶冶を爲  
 し舍皆これを其の宮中に取つて  
 之れを用ひざる、何爲れぞ紛紛  
 然として百工と交易せざる、何

○ 械器は器械といふに同じ。  
 ○ 陶冶はかじやなり。

○ 交易は互に便利を得るのみ、豈他  
 を苦勞せしむと思ふものならんや。

○ 宮中に於てすべての物を造るべ  
 しとなり。

○ 紛紛然はわづらはしきこと。

ぞ許子の煩を憚らざる。

曰はく。百工の事は固より耕  
 し且つ爲すべからず。

然らば則ち天下を治むること獨  
 り耕し且爲すべけんや。大人の  
 事あり、小人の事あり。且つ一  
 人の身にして百工の爲す所備は  
 らんと、如し必ず自から爲して

○ 煩は煩雜と熟しうるさきこと。

○ 許子の説の如く耕すと共に天下  
 を修むるといふことの愚かなる事  
 を喝破せるなり。

○ 大人は政治家。

○ 小人は農工商。



而る後に之れを用ひば、是れ天下を率<sup>ひ</sup>ゐて路にするなり。

故に曰はく、或は心を勞し、或は力を勞すと。心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治めらる。人に治めらるゝ者は人を食<sup>ひ</sup>ひ、人を治むる者は人に食<sup>は</sup>る。天下の通義なり。

○路にすは道路にあちこち奔走せしむるのみをいふ。

○故に曰はくは古人の語をいふ。

○互に助け合ふことをいふ。

○通義は普通の義理なり。

堯の時に當つて天下猶ほ未だ平かならず、洪水横流して天下に汜<sup>ん</sup>濫す、草木暢茂し、禽獸繁殖す、五穀登<sup>ら</sup>ず、禽獸人に偏<sup>る</sup>、獸蹄鳥迹の道中國に交はる。堯獨り之れを憂ひて、舜を擧げて敷<sup>き</sup>治めしめ、益をして火を掌<sup>ら</sup>らしむ。益山澤を烈<sup>して</sup>之れを

○洪水は大水○横流はあふれること

○汜濫はみなぎりみつること。

○暢はのびること。

○五穀は稻、黍、稷、麥、菽なり。

○蹄はひづめ。

○敷は布に同じ、國中全體におしひるげること。

○益は舜の臣。

焚く、禽獸逃れ匿る。禹は九河を疏し、濟漯を淪へて、これを海に注ぎ、汝漢を決し、淮泗を排して、これを江に注ぐ、然る後中國得て食ふべし。是の時に當つてや、禹外に八年、三たび其の門を過ぐれども入らず、耕さんと欲すと雖も得んや。

○濟、漯は共に河の名。

○汝、漢、淮、泗は皆河の名。

○決、排共に水の止まれるをおしひらいて流しやること○江は揚子江。

○食は生活すること。

○其門は自家の門。

○家の前を通りながら入れぬほど多忙であるに、どうして耕す暇があらうかとなり。

后稷は民に稼穡を教へ、五穀を樹藝せしむ、五穀熟して、民人育す。

○后稷は官名、農務大臣なり、粟之れに任ぜり○稼は種まき、穡は實入れること○樹はたねまき、藝はうえつけること。

○逸居はきまゝにくらすこと。

○聖人は舜をいふ○契は舜の臣。

○司徒は官名、文部大臣なり。

○此五條は五倫なり、實に東洋道徳の大特色たり。

人の道あるや、飽食煖衣、逸居して教なければ則ち禽獸に近し。聖人之れを憂ふるあり、契をして司徒たらしめ、教ふるに人倫を以てす。父子親あり、君臣義

あり、夫婦別あり、長幼序あり、  
朋友信あり。放勳日ごとに之れ  
を勞ねがひ之れを來きけ、之れを匡たし  
之れを直ただらし、之れを輔たすけ之れ  
を翼たすけ、自みづから之れを得しめ、  
又従つて之れを振徳す。聖人の  
民を憂ふること此かくの如し、而る  
を耕すに暇いとがあらんや。

○別はきまりをたつること、蓋し男  
女は自然にまかせばみだらしくな  
る故、之れをふせぎとめて正しから  
しむること○序は次第順序○放勳  
は大勳にして堯を稱す。

○振徳は恩恵を施してはげましす  
すむるべし。

堯は舜を得ざるを以て己おのれが憂  
と爲し、舜は禹、皐陶ことうを得ざる  
を以て己おのれが憂と爲す。夫れ百  
畝ぼくの易やすまらざることを以て己おのれ  
が憂と爲す者は農夫なり。  
人に分つに財を以てする、之れ  
を惠けいと謂ひ、人に教ふるに善を  
以てする、之れを忠と謂ひ、天

○皐陶も亦賢人なり。

○耕をのみ事とする者は農夫なり、  
大人といふ能はず、まして聖賢たる  
をや。

下のために人を得る、之れを仁と謂ふ。是故に天下を以て人に與ふるは易く、天下のために人を得るは難し。

孔子曰はく。大なる哉、堯の君たるや。惟天を大なりと爲す、惟堯之れに則る、蕩蕩乎として民能く名づくることなし。君な

○ 惠や忠を行ふことは易けれども、仁を行ふことは甚だ難し。

○ 此語は論語の泰伯篇に見ゆ。

○ 大なりとすは徳の大なるものとする事。

○ 蕩々乎は廣遠なる形。

る哉舜や、巍巍乎として天下を

有らて而も與からずと。堯舜の

天下を治むる、豈其の心を用ふ

る所なからんや、亦耕すに用ひ

ざるのみ。

吾夏を用て夷を變ずる者を聞く、

未だ夷に變ぜらるゝ者を聞かざ

るなり。陳良は楚の産なり、周

○ 巍巍乎は高大なる形。

○ 典からずはかれこれと手を出して天下の主たるらしき振舞をせざること。

○ 夏は美なること、禮義の教うるはしき國をいふ ○ 變ずるは教化するなり。

公仲尼の道を悦びて、北して中國に學ぶ、北方の學者未だ之れに先んずること能はず。彼はいはゆる豪傑の士なり、子の兄弟之れに事ふること數十年、師死して、遂に之れに倍く。

昔し孔子没して、三年の外、門人任を治めて將に歸らんとす、

○豪傑は才學識見のすぐれたる者をいふ。

○倍は背に同じ。

○三年の外は三年の喪を終りし後なり。

○任を治むとは行李をつくること。

入りて子貢に揖し、相嚮ひて哭し、皆聲を失ふ、然る後歸れり。

子貢反つて室を場に築き、獨り居ること三年、然る後歸れり。

他日子夏、子張、子游、有若の聖人に似たるを以て孔子に事ふる所を以て之れに事へんと欲し、曾子に強ふ。曾子曰はく、不可

○子貢は喪事を主り、且つ猶ほ留まれば、故に皆別れの挨拶を爲す○揖は手を組みて挨拶すること。

○場は祭りの壇場なり。

○似たるは容貌言語の孔子に似たるをいふ。

○強は強に同じ、むりにすゝむること。

なり、江漢以て之れを濯あらひ、秋陽以て之れを暴さらすも、皜皜かうかう乎として尙なほふべからざるのみ。

今や南蠻なんばん馱舌てさの人、先王の道に非ず、子子の師しに倍そむきて之れを學ぶ、亦曾子そうしに異り。吾幽谷ゆうこくより出で、喬木きょうぼくに遷うつる者を聞く、未だ喬木を下つて幽谷に入る者

○江漢は共に河の名。  
○秋陽は夏の熱き日なり、周の秋は恰度夏にあたればなり○皜々乎はあくまでも白き形、孔子の徳の純潔にして、他人の比すべからざるをいふ。

○馱はもつ、惡鳥なり、以て南蠻人にとふ。

○幽谷より出で、喬木に遷るの語は詩經小雅伐木の篇にあり、鳥についていへり、だんく、進歩するをいふ、幽谷に入る方は退歩なり。

を聞かずと。

魯頌ろしやうに曰はく、戎狄是れ膺うち、荆舒けいじよ是れ懲ちやうす。周公方ほうに且かつつ之れを膺うつと。子是れ之れを學ぶ、亦不善いふぜんの變と爲す。

許子の道に従はゞ、則ち市賈か貳ふたならず、國中くにちゆう僞いつはりなく、五尺の童どうをして市しに適あてかしむと雖

○魯頌は詩經の篇の名○膺は擊、懲は止、膺懲と熟す。

○荆は楚の本土、舒は楚の属地なり。

○之れは此の如き野蠻なる楚の國の人許子の教をさす。

○此一段は陳相の辯解なり。

○市賈貳ならずは物價の一定すること、許子の道純直質樸なればなり。

も、之れを或は欺あやむくなからむ。  
 布帛の長短同じければ則ち賈  
 相若かむ。麻縷まろ絲絮じょの輕重同  
 じければ則ち賈相若かむ、五  
 穀の多寡同じければ則ち賈相  
 若かむ、履くつの大小同じければ  
 則ち賈相若かむ。

曰はく、物の齊ひとしからざるは物

○若かむは同様なること。  
 ○縷はすぢいと○絲は蠶の絲○絮  
 はわた。

○物は自然に同じからず、故に價も

の情なり、或は相倍は蕪しし。或は  
 相什百し、或は相千萬す。子比  
 して之れを同じうす、是れ天下  
 を亂みだすなり。巨屨くつ小履くつ賈を同じ  
 うせば、人豈之れを爲つくらんや。  
 許子の道に従ふは、相率ひきゐて偽いつはり  
 を爲す者なり、惡いづんぞ能く國家  
 を治めんや。』

亦同じくなること能はず○蕪は五  
 倍○什百は十倍百倍○千萬は千倍  
 萬倍○比はならべそるへること。

○履はくつなり。

○偽は大小輕重の物を皆同一の價  
 とすることは正しきことならざる  
 をいふ。

○許子の道到底よるべきものにあ  
 らざること論斷せり。

墨者夷之・徐辟ヘキに因つて孟子を見んことを求む。

○墨者は墨子(名は翟テキ)が節儉の説を奉ずる人○徐辟は孟子の弟子。

孟子曰はく。吾固より見んことを願ふ、今吾尙ほ病む、病愈ゆれば我且ハコに往ゆいて見んとす、夷子來らざれ。

他日又孟子を見んことを求む。

孟子曰はく、吾今は則ち以て見

るべし。直たさずんば則ち道見あらはれず、我且ハコに之れを直たさんとす。吾聞く夷子は墨者なりと、墨の喪を治むるや薄うすきを以て其の道と爲す、夷之は以て天下を易かへんことを思ふ、豈以て是こゝに非ずと爲して而も貴たつとばざらんや。然り而して夷子其の親を葬ること

○直すは墨子の説を正すこと。

○墨子は薄葬を以て主義とす。

○易へんとは風俗を改めんとすること。

○薄葬を以て是に非ずと考ふること。

○夷子實際は葬を厚くせり。



厚ければ、則ち是れ賤む所を以て親に事ふるなり。

徐子以て夷子に告ぐ。

夷子曰はく。儒者の道は、古の人赤子を保んずるが若しと、此の言は何の謂ぞや。之れは則ち以爲へらく、愛に差等なく、施すこと親より始む。

○賤む所は厚く葬ることをいふ。

○赤子云々の語は書經周書康誥の篇にあり。

○すべての物を愛すること皆赤子を安ずるが如くして、少しも差別なきことを云ふ。

孟子曰はく。夫の夷子は信に以爲へらく、人の其の兄の子を親しむと、其の隣の赤子を親しむが若しと爲すか。彼取るとあるのみ。赤子匍匐して將に井に入らんとす、赤子の罪にあらざるなり。且つ天の物を生ずるや、之れをして本を一にせしむ、而

○此間自ら差等あるべきこと自然の人情なり。

○彼は康誥の文をさす○取るとは根據あり理山あるをいふ○匍匐はあらばひてゆくこと○赤子の罪にあり、これ人民の難澁するは上の教化明かならざるがためなれば、人民を保護すること赤子の如くせよといふ意味に過ぎず、愛に差等なしと解するはこじつけといふべしとなり○本を一にすとは親を一に定むる

るに夷子は本を二にするが故なり。

蓋し上世嘗て其の親を葬らざる者あり、其の親死すれば則ち擧て之れを壑たにに委すつ。他日之れを過ぐれば狐狸之を食ひ、蠅蚋あぶ之れを嘍くちふ、其の類かたひに泚あせあり、睨ひして視みず。夫れ泚せいや人のため

こと○二にすは親に二通りもあること、進んでは幾通りもあることとなるなり。

○蛆ははい○蚋はあぶ○蛄はあり。

○類は其子のひたひなり。

○睨はよこめてみること○視は正しくみること。

に泚するに非ず、中心より面目に達す。蓋し歸つて藁裡さうりを反かへして之れを掩おほふ、之れを掩ふこと誠まことに是これならば、則ち孝子仁人の其の親を掩おほふこと亦必ず道あらむ。

徐子以て夷子に告ぐ。

夷子憮然ぶぜんたり、爲間しほまありて曰

○中心は心中哀痛して已まざること○達はあらはるゝこと。  
○藁裡は土籠又は土罌、土を入れてはこぶ物。  
○親の死骸を掩ふにも道あるべければ、其を葬るにも亦道あるべし。

○憮然はぼんやりして居る形。

はく。之に命ぜり。」

陳代曰はく。諸侯を見ざるは  
何の義ぞや、宜しく小の若く  
然るべし。今一たび之れを見  
れば大は則ち以て王たり、小  
は則ち覇たらむ。且つ志に曰  
はく、尺を枉げて尋を直ぶと、  
宜しく爲すべきが若くなるべ

○之は夷子の名○命ぜりは教へら  
れて領解したること。

○陳代は孟子の弟子。

○義は意味といふが如し。

○小の若くは度量狭小なる様に見  
らるゝことなり。

○大は大國○小は小國。

○志は記録。

○尋は八尺をいふ、ひろとよむ。

○此語は小事を忍びて大事を成し  
遂ぐること。

○爲すべしとは道を行ふこと。

し。

孟子曰はく。昔し齊の景公田す、  
虞人を招くに旌を以てす、至ら  
ず、將に之れを殺さんとす。  
志士は溝壑に在ることを忘れず、  
勇士は其の元を忘れず。  
孔子奚をか取れる、其の招くに  
非れば往かざるに取れるなり。

○田は獵に同じ。

○虞人は山澤を守る役人。

○旌ははたなり、本と大夫を招くに  
用ふ、虞人に對しては皮冠を以て招

くこと禮なり、景公之れを間違へり、  
故に虞人行かず、而も公却つて虞人

を以て間違へりと爲し之を殺さん  
とせり。

○此語は孔子が虞人を嘆美せるな

り○在るは死地に居ること○元は  
首は失ふことあるをいふ。

○招くに非ずは相當の方法によら  
ざることをいふ。

其の招くを待たずして往くが如きは何ぞや。

且つ夫れ尺を枉<sup>ま</sup>げて尋を直<sup>の</sup>ぶるものは利を以て言ふなり、如し利を以てすれば、則ち尋を枉<sup>ま</sup>げて尺を直<sup>の</sup>べ而も利あるも亦爲すべきか。

昔し趙簡子王良と嬖<sup>へい</sup>奚<sup>き</sup>とをして

○待たずは諸侯が招かざるに急いで行くこと。

○利益主義を排斥す、唯仁義の大道を行ふを志とするのみ。

○趙簡とは晋の卿なり、名を鞅といふ、簡は諡、○王良は名高き御者、馬を

乗らしむ、終日にして一禽を獲ず。嬖奚反命して曰はく、天下の賤工なりと。或人<sup>ある</sup>以て王良に告ぐ。良曰はく、請<sup>よ</sup>ふ之<sup>の</sup>れを復<sup>た</sup>びせむ。彊<sup>し</sup>いて後に可<sup>き</sup>かる。一朝にして十禽を獲たり、嬖奚反命して曰はく、天下の良工なりと。簡子曰はく、我<sup>われ</sup>女<sup>な</sup>と乗<sup>る</sup>こ

使<sup>し</sup>ふ者<sup>者</sup>○嬖奚は簡子の寵臣、奚は名乗るは一車に同乗したること。

○賤工は拙き御者。

○彊は強請すること。

とを掌らしめむと。王良に謂ふ。  
 良可かずして曰はく、吾之れが  
 ために我が馳驅を範するも、終  
 日一を獲ず、之れがために詭遇  
 すれば、一朝にして十禽を獲た  
 り、詩に云ふ、其の馳するを失  
 はず、矢を舍ちて破るが如しと。  
 我は小人と乗ることを貫はず、

- 範は規則正しくすること。
- 詭遇は正しき法によらず、いつは  
りて射あつるやうに遇はしてゆく  
こと。
- 此詩は詩經小雅車攻の篇。
- 正しく馳せて正しく中るをいふ。
- 小人は鑿筈をさす。
- 貫は慣に同じ。

請ふ辭せむと。

御者すら且つ射者と比すること  
 を羞づ、比して禽獸を得ること  
 丘陵の若しと雖も爲さざるなり。  
 道を枉げて彼に従ふが如きは何  
 ぞや。且つ子は過てり、己れを  
 枉ぐる者は未だ能く人を直ふる  
 者あらざるなり。」

- 且は猶といふが加し。
- 比は相竝ぶこと。
- 陵もおかなり。
- 枉は曲なり、即ち悪事なり。何ぞ能  
く人を正すことを得んや、孟子の論  
誠に正々堂々たり。

景春曰はく、公孫衍・張儀は豈  
 誠の大丈夫ならずや、一たび  
 怒つて諸侯懼れ、安居して天  
 下熄む。

孟子曰はく。是れ焉んぞ大丈夫  
 たることを得んや。子未だ禮を  
 學ばざるか。丈夫の冠するや父  
 之れに命ず。女子の嫁するや母

○景春は縦横の術諸侯をたてよこ  
 と連合する政策を好む者なり○公  
 孫衍は魏の人、秦の相となり、五國の  
 合縱を策せり○張儀も魏の人、衍に  
 先ちて秦に相となり、六國を連衡し  
 て秦に事へしめたり○安居は靜か  
 にしてゐること○熄は戰亂止むこ  
 と。

○冠は二十歳にして始めて冠を頂  
 きて成人の儀式を爲すこと。  
 ○命は告げ戒むること。

之れに命ず、往いて之れを門に  
 送り、之れを戒めて曰はく、往  
 きて女が家に之き必ず敬み必ず  
 戒め、夫子に違ふことなかれと。  
 順ふことを以て正しと爲すは妾  
 婦の道なり。  
 天下の廣居に居り、天下の正位  
 に立ち、天下の大道を行ひ、志

○家は、女は夫の家を以て己れの家  
 とするが故にしかいふ○夫子はを  
 つと○順は何事も人に順ひ従ふて  
 さからはざること、即ち前の二人は  
 諸侯の意を迎へ秦主の欲に順ひて、  
 たゞ其等の都合よきようにしたる  
 者にして、妾婦同様なりと擯斥して、  
 景春の瞻玉を奪ひたるなり。

○正位は男子に生まれたるをいふ。  
 ○大道は仁義の道なり。

を得れば民と之れに由り、志を得ざれば獨り其の道を行ふ。富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず、此れ之れを大丈夫といふ。」

周霄問うて曰はく。古の君子は仕ふるか。

○淫は心のみだすこと ○移は心をかへること ○屈は心なくぢくこと ○富貴貧賤威武は人の最も影響を受け易きもの、而も之れに動かされざる者、是れ實に非凡の人にあらずして何ぞや。

○周霄は魏の人 ○孟子の仕へざるを諷刺す。

孟子曰はく。仕ふ。傳に曰ふ、

孔子三月君なければ則ち皇皇如たり、疆を出づるに必ず質を載すと。公明儀曰はく、古の人は三月君なければ則ち弔すと。

三月君なければ則ち弔すとは以だ急ならずや。

曰はく。士の位を失ふこと猶ほ

○皇々如は失望の形、何となく物足らぬ有様をいふ ○疆を出づは他國に出で行くこと ○質は贄に同じ、始めて君に見ゆる時の進物なり、仕を得んがための用意に持参せられたるなり ○公明儀は魯の賢人 ○弔は、主なきは非常の不幸なり、故に弔ひ慰むるなり。

諸侯の國家を失ふがごとし。禮に曰ふ、諸侯耕し助けて以て粢盛に供す、夫人蠶繰して以て衣服を爲る。犠牲成らず、粢盛潔からず、衣服備はらずんば、敢て以て祭らず、惟士は田なれば則ち亦祭らず、牲殺器皿衣服備はらず、敢て以て祭らざれば、

○耕助は公田を耕すに民力を助けて自身先づ耕すこと○粢盛は祭禮の供物、粢は實、盛はもりもの、共に黍稷稻粱の類をいふ○蠶繰は蠶を養ひ繭をくりだすこと○犠牲は祭祀に供ふる生物(いきにへ)、主に牛羊の類を用ふ。  
○田は知行、  
○牲殺はいきにへを殺して供ふる

則ち敢て以て宴せず、亦弔するに足らずや。

○宴はさかもりすること

疆を出づるに必ず質を載するは何ぞや。

曰はく。士の仕ふるや猶ほ農夫の耕すがごとし、農夫豈疆を出づるがために其の耒耜を捨てんや。

○士の質は農夫の耒耜の如く重寶なるものなり。



曰はく。晋國も亦仕國なるに、未だ嘗て仕ふること此の如く其れ急なるを聞かず、仕ふること此の如く其れ急ならば、君子の仕へ難きは何ぞや。

曰はく。丈夫生れて之れがために室あらんことを願ひ、女子生れて之れがために家あらんこと

○仕國は仕ふべき國

○益々孟子を追撃するなり。

○室は内室、即ち妻をいふ。

○家はとつぐ所、即ち夫をいふ。

を願ふ。父母の心、人皆之れあり。父母の命媒妁の言を待たず、穴隙を鑽つて相窺ひ、牆を踰えて相従はゞ、則ち父母國人皆之れを賤む。古の人は未だ嘗て仕ふるを欲せずんばあらず、又其の道に由らざるを惡む、其の道に由らずして往く者は、穴

○父母の心は男子女子に各々縁組をさせんと心の心がけあり。

○媒妁はなかうど、兩方を謀り合せ酌み合する意味。

○隙はすさま ○鑽はきりにて穿つこと。

○道に由らずして仕ふる者は前の男女の如し、賤むべきの至りなり。

隙を鑽ると之れ類するなり。」

彭更問うて曰はく。後車數十

乗、從者數百人、以て諸侯に

傳食す、以だ泰ならずや。

孟子曰はく。其の道に非れば、

則ち一簞の食人に受くべからず。

其の道の如くなれば、則ち舜・堯

の天下を受くるも以て泰と爲さ

○彭更は孟子の弟子。

○傳食は客館に舍りて其の飲食を受ること○泰は奢侈。

○孟子の贅澤を疑ひ問ふ。

○簞は竹にて作りたる圓き食器、かたみといふ○食は飯なり、音はし、食ふといふときは音しよくとなる。

ず。子以て泰と爲すか。

曰はく。否、士事なくして食

ふは不可なり。

曰はく。子、功を通じて事を易

へ、羨るを以て足らざるを補は

ざれば、則ち農に餘粟あり、女

に餘布あらむ。子如し之れを通

ぜば、則ち梓匠輪輿皆食を子に

○事なしは職務なきこと。

○功を通じて事を易ふとはいろいろの仕事交換し合ふこと。

○通ずは餘粟餘布を通用すること  
○梓は器械を造る者○匠は宮室を造る者○輪は車輪を造る者○輿はこしや車を造る者。

得む。此に人あり、入つては則ち孝、出で、は則ち悌、先王の道を守りて以て後の學者を待つ、而るに食を子に得ず。子何ぞ梓匠輪輿を尊びて、仁義を爲す者を輕んずるや。

曰はく。梓匠輪輿は其の志將に以て食を求めんとす、君子

○得むは受くること。  
○此人は即ち孟子自身をいふ即ち仁義を爲す者なり。

○得ずは受くることなきをいふ。

の道たるや、其の志亦將に以て食を求めんとするか。

曰はく。子何ぞ其の志を以てすることせんや、其の子に功ある者は食ふべくして之れを食ふ、且つ子は志を食ふか、功を食ふか。

曰はく。志を食ふ。

○孟子の論鋒銳利にして當るべからず。

曰はく。此に人あり、瓦を毀ち  
塼を畫ぎて、其の志將に以て食  
を求めんとすれば、則ち子は之  
れを食ふか。

曰はく。否。

曰はく。然らば則ち子は志を食  
ふに非ず、功を食ふなり。」

萬章問うて曰はく。宋は小國

○いかなる論敵と雖も終に降服せ  
ざるを得ざるなり、痛快痛快。

○萬章は孟子の弟子、孟子の編纂に

なり、今將に王政を行はんと

す、齊楚惡みて之れを伐たば

則ち之れを如何せむ。

孟子曰はく、湯亳に居る、葛と  
鄰を爲す。葛伯放にして祀らず。

湯人をして之れに問はしめて曰  
はく、何爲れぞ祀らざる。曰は  
く、以て犠牲に供するものなし。

與かつて力ありし者なり。

○湯は湯王○亳は地名湯王の舊居  
なり○葛も地名夏の諸侯なり○放  
はきまゝなること○祀らずは先祖  
をまつらざること。

○犠牲はいきにへとよむ神に供ふ  
る生物なり。

湯之れに牛羊を遣らしむ、葛伯之れを食ひ、又以て祀らず。湯又人をして之れに問はしめて曰はく、何爲れぞ祀らざる。曰はく、以て粢盛に供するものなし。湯亳の衆をして往いて之れがために耕し、老弱をして食を饋らしむ。葛伯其の衆を率ゐ、其の

○粢盛は神前のもり物にする黍稷等の類を稱す。

酒食黍稻ある者を要して之れを奪ふ、授けざる者は之れを殺す。童子あり黍肉を以て餉る、殺して之れを奪へり。書に曰ふ、葛伯餉に仇すと。此れ之れを謂ふなり。  
其の是の童子を殺すがために之れを征す。四海の内皆曰はく、

○要は侍らぶせすること。

○葛伯の亂暴驚くに堪へたり。

○書は書經商書仲虺の誥○餉は贈り來りし童子をいふ。

○仇は殺すこと。

○征は伐つこと。

天下を富めりとするに非ず、匹夫匹婦のために讎を復ふるなりと。下略

孟子戴不勝に謂つて曰はく。子は子の王の善ならんことを欲するか。我明かに子に告げむ、此に楚の大夫あり、其の子の齊語ならんことを欲すれば、則ち齊

○富めりは富を食ること。  
○匹夫匹婦はいやしき夫婦。  
○讎を復ふは其子のために仇を報ずること、復讎と熟し、かたきうちとよむ。

○戴不勝は宋の臣、字を盈之といふ、當時宋の政を執れり、故に孟子之れに王をして善ならしむる方法を教ふ。

○傅はもり役、侍者なり

人をしてこれに傅たらしめんか、楚人をしてこれに傅たらしめんか。

曰はく。齊人をして之れに傅たらしめむ。

曰はく。一齊人之れに傅たり、衆楚人之れを咻しうす、日に撻つて其の齊ならんことを求むと

○咻は楚の言語にてやかましく話し合ふこと。  
○齊ならんは齊の語にすること。

雖も得べからず。引いて之れを  
莊嶽あいたの間に置くこと數年ならば、  
日に撻つて其の楚ならんことを  
求むと雖も亦得べからず。

子薛居州せうを善士なりと謂ひて之  
れをして王の所に居らしむ。王  
の所に在る者長幼卑尊皆薛居州  
ならば、王誰たれと與にか不善を爲

○莊は街の名○嶽は里の名。二地共に齊にあり。

○薛居州も亦宋の臣なり。

さん。王の所に在る者長幼卑尊  
皆薛居州に非ずんば、王誰と與  
にか善を爲さん。一の薛居州獨  
り宋王を如何にせん。」

公孫丑問うて曰はく。諸侯に  
見ゆるは何の義ぞ。

孟子曰はく。古へ臣たらざれば  
見えまず。段干木たつかんぼくは垣かきを踰こえて之

○一人にては力及げず、皆協力して事に當るべきことを言へり。

○又孟子の見えざるを疑ひ問ふ。

○段干木は魏の文王の時の人、道を

を辟け、泄柳は門を閉ぢて内れず。是れ皆已甚だし、迫らば斯に以て見るべし。

陽貨孔子を見んと欲す、而も禮なきを惡む。大夫士に賜ふことあるときは、其の家に受くるを得ず、則ち往いて其の門に拜す。陽貨孔子の亡きを囑ひて、孔子

守つて仕へざりし人なり。○辟は文王の來り見しをさけたるなり。○泄柳は魯の繆公の時の人、前に出づ。○迫は切迫なり、二君の如く熱心に見んとせらるゝ場合をいふ。

○陽貨は魯の季氏の家臣、前に出づ。

○惡むは畏るの意味。

○拜すは大夫の處に往きて受くること、是れ禮式として定まりなれり。

に蒸せる豚を饋れり。孔子も亦

其の亡きを囑ひ往いて之れを拜す。是の時に當りて陽貨先んずれば、豈見ざるを得んや。」

曾子曰はく、肩を脅かして譎ひ笑ふは、夏畦よりも病ると。子路曰はく、未だ同せずして言ふ、其の色を觀るに赧赧然たり、由

○孔子陽貨の人物を善とせず、之れに會ふことをさげられたるなり。

○此事論語陽貨篇に出たり。

○先ずるは先づ孔子を訪問することといふ。

○肩を脅かすは首を低くすることにして、恭敬の甚だしき形。

○夏畦は夏日田を治むるの勞苦をいふ。

○同は同意すること。

○赧々然ははぢて面を赤くする様。○由は子路の名。



の知る所に非るなりと。

是れに由つて之を觀れば、則ち

君子の養ふ所知るべきのみ。」

戴盈之曰はく。什が一にして、

關市の征を去ること、今茲は

未だ能はず。請ふ、之れを軽く

して以て來年を待ち、然る後

已めむ。如何。

○養ふとは、浩然の氣を養ふこと、光明正大の道を守つて、敢て人に屈從し阿諛せざること。  
○戴盈之は宋の大夫、前に出でたる戴不勝なり。○什一は井田の法。○關市の征は關や市に課する税なり。

孟子曰はく。今人日々其の鄰の

雞を攘む者あり、或人之れに告

げて曰はく、是れ君子の道に非

ずと。曰はく、請ふ之れを損せ

む、月々一雞を攘み、以て來年を

待ちて然る後に已めむと。如し

其の義に非るとを知らば、斯に

速に已めむ、何ぞ來年を待たん。」

○損は減ずること。

○不義の事はすぐさま已むべきなり。

公都子曰はく。外人皆夫子辯を好むと稱す、敢て問ふ何ぞや。

孟子曰はく。予豈辯を好まんや、予已むを得ざればなり。

天下の生久し、一たび治まれば一たび亂る。堯の時に當つて、水逆行して中國に氾濫し、蛇龍之

○公都子は孟子の弟子。辯は辯説。

○生は生民以來なり。

○逆行はさかさまに流ること。

○氾濫はあふれみなぎること。

れに居る、民定まる所なし、下なる者は巢を爲くり、上なる者は營窟を爲くる。書に曰はく、洚水余を警むと。洚水は洪水なり。禹をして之れを治めしむ。禹地を掘つて之れを海に注ぎ、蛇龍を驅つて之れを菹に放つ。水は地中に由つて行く、江淮河

○下は低き處 ○巢は木の上に住むなり。

○上は高き處。

○營窟はいはやがならびをること。

○書は書經大禹謨の篇。

○警は政治につき反省すること。

○驅はおひやること。

○菹は澤。

漢是れなり。險阻そ既に遠ざかり、  
鳥獸の人を害する者消ゆ、然る  
後人平土を得て是れに居る。

堯舜既に没して、聖人の道衰へ、  
暴君交こ交く作り、宮室を壊こちて以  
て汚池おと爲し、民安息する所な  
し、田を棄て、以て園囿いとなし、  
民をして衣食することを得ざら

○險阻は洪水の難をいふ。

○暴君は夏の太康、孔甲、履癸、殷の武  
乙等をいふ。

○汚は沼なり。

○園囿は植物園と動物園なり。

しむ、邪説暴行又作る、園囿汚  
池沛澤はい多くして、禽獸至る。紂  
の身に及んで天下又大いに亂る。

周公武王を相あけて紂を誅し、奄  
を伐つ、三年其の君を討ち、飛  
廉を海隅に驅つて之れを戮し、  
國を滅ぼすもの五十、虎豹犀象  
を驅つて之れを遠ざく。天下大

○邪説は民を惑はす説。

○暴行は民を害する行。

○汚汗同じく、みづたまり。

○沛は水中に草木の生じたる處。

○奄は東方にある無道の國なり。

○飛廉は紂の嬖臣にして悪人なり。

いに悦ぶ。書に曰ふ、丕おほいに顯あきかなるかな文王の謨はかりごと、丕おほいに承うけたるかな武王の烈いさはし、我が後人を佑たすけ啓ひらき、咸みな正を以てして缺かくることなしと。

世衰へ道微かすかにして、邪說暴行有また作る、臣にして其の君を弑ころする者之れあり、子にして其の父を

○書は書經周書君牙の繚。

○正は正大の道なり。

○有は又に同じ。

○弑は殺に同じ、但下の者が上の人を殺す場合に用ふる字。

弑する者之れあり、孔子懼おそれて

春秋を作る。春秋は天子の事なり。是故に孔子曰はく、我を知る者は其れ惟ただ春秋か、我を罪する者は其れ惟ただ春秋かと。

聖王作おこらず、諸侯放恣しにして、處士横議し、楊朱墨翟てきの言天下に盈みつ、天下の言楊に歸かへせざれ

○春秋は書名。

○天子の事は名分を正して賞罰を明かにすること、孔子之れを春秋によつてなしたるなり○知るは精神をこめたるをいふ○罪するは天子の事を爲したるが故にいふ○蓋し春秋は孔子の心血を注ぎて作りたるものなり。

○放恣は勝手氣儘なること○處士は仕へずになる者○横議は勝手に議論○楊朱、字は子居、朱は名なり、自愛説を唱へて、人のためには一毛をも與ふべからずといふ、列子、莊子の

ば則ち墨に歸す。楊氏は我がため  
にす、是れ君を無するなり、  
墨氏は兼愛す、是れ父を無する  
なり。

父を無し君を無するは是れ禽獸  
なり。

公明儀曰はく、庖に肥肉あり、  
廐に肥馬ありて、民に飢色あり、

書に散見す○墨翟は兼愛説を主張  
す、墨子の著あり、前に出づ○兼愛は  
すべての人を同等に愛すること。

○自愛論者、兼愛論者は是れ禽獸な  
り、何となれば人間の特性なる忠孝  
の二大徳をすつればなり。

○此の一段前(十五頁)に出づ。

野に餓莩あり、此れ獸を率ゐて  
人を食ましむるなりと。

楊墨の道息まずんば、孔子の道  
著はれず、是れ邪説民を誣ひ仁  
義を充塞すればなり、仁義充塞  
すれば、則ち獸を率ゐて人を食  
ましむ、人將に相食まんとす。  
吾此れがために懼れて、先聖の

○楊墨は楊朱と墨翟。

○誣は欺き惑はすこと。

○仁義の道絶えなば人も亦相互に  
噬み合ひ食ひ合ふに至るものなり、  
其の實例古今東西にあり。

道を閑ひて、楊墨を距ぎ、淫辭を放つ、邪説の者作るとを得ず。其の心に作りて其の事に害し、其の事に作りて其の政に害す。聖人復起るも吾が言を易へじ。昔し禹洪水を抑めて天下平かなり、周公夷狄を兼ね、猛獸を驅つて百姓寧し、孔子春秋を成し

○閑は習ふこと ○距は拒に同じ。  
○淫辭は社會を害する語 ○放は驅逐すること ○心に作れば行にあらはれ、遂に政教を害す、其の結果の恐るべきこと勿論なれど、抑も其の根本たる心事こそ深く警戒すべきものなれ。眞に孟子の言の如し、聖人も此言を易ふる能はざるなり。

て亂臣賊子懼る。詩に云ふ、戎狄是れ膺ち、荆舒是れ懲す、則ち我に敢て承くることなしと。父を無し君を無するものは、是れ周公の膺つ所なり。我も亦人心を正し、邪説を息め、諛行を距ぎ、淫辭を放ち、以て三聖者に承がんと欲す、豈辯を

○此詩前(二四七頁)に出づ。

○我は周公なり ○承るは當ること、又比較すること。

○諛行は偏曲なる行。

○三聖は禹と周公と孔子となり。

好まんや、予已むを得ざればなり、能く言ふて楊墨を距ぐ者は聖人の徒なり。」

匡章曰はく。陳仲子は豈誠の廉士ならずや、於陵に居りて、三日食はず、耳聞かなく、目見るなし。井の上に李あり、蝻實を食ふ者半ばに過ぐ、匍

○あくまでも辯じて以て自愛兼愛の徒を距ぎて、人を安んじ世を平かにせざるべからざるなり。

○匡章は齊の人○陳仲子も齊の人○廉は清なり、自ら潔うしてかろしくせざること○於陵は地名。

○蝻はすくもむし、實の中にをる蟲なり。

匍して往き、將りて之れを食ふ、三たび咽して、然る後耳聞くことあり、目見ることあり。

孟子曰はく。齊國の士に於て吾必ず仲子を以て巨擘と爲す。然りと雖も仲子惡んぞ能く廉ならん、仲子の操を充てば則ち劓に

○匍匍ははふこと

○咽はのみこむこと。

○巨擘は大指なり、人にすぐれてゐることをいふ。

○仲子の廉き操行は劓に同じといふべきなり○充はおしつめること。

して而る後に可なる者なり。

夫れ蚓は上は槁壤を食ひ、下は黄泉を飲む。仲子が居る所の室は伯夷の築く所か、抑も亦盜跖の築く所か、食ふ所の粟は伯夷の樹ゆる所か、抑も亦盜跖の樹ゆる所か、是れ未だ知るべからざるなり。

○槁壤は乾きたる土。

○黄泉は地中の水の、共に潔きものなり、故に之れを食ふ蚓も亦廉なりといふべし、然るに仲子の居處、食物は不潔なるやも知れざるに於ては、未だ仲子を以て廉なりといふべからず、蚓にも劣れりといふべし。  
○盜跖は古の名高き盜賊にして、跖は名なり。

曰はく。是れ何ぞ傷まんや、彼の身は屨を織り、妻は辟纊して、以て之れに易ふるなり。

曰はく。仲子は齊の世家なり、兄戴蓋の祿は萬鍾なり、兄の祿を以て不義の祿と爲して食はず、兄の室を以て不義の室と爲して居らず、兄を辟け母に離れて於

○傷まんは居處及食物の何人に作られたりとも心配には及ばぬとなり  
○辟纊は麻絲を練ること。

○之は食と宅とをさす。

○世家は世々廂たる家柄。



陵に處る。他日歸れば則ち其の兄に生ける鵝を饋りたる者あり、己れ頻願して曰はく、惡んぞ是の駮駮の者を用ふることを爲さんやと。他日其の母是の鵝を殺し、之れに與へて食はしむ、其の兄外より至つて曰はく、是れ駮駮の肉なりと、出で、之れを哇

○頻願は肩をしかめ、頰をあつめること。

○駮々は鵝の鳴く聲 ○用ふるは食事に用ふること。

○哇は一旦食ひし鵝の肉を吐き出せるなり。

けり。

母を以てすれば則ち食はず、妻を以てすれば則ち之れを食ふ、兄の室を以てすれば則ち居らず、於陵を以てすれば則ち之れに居る、是れ尙ほ能く其の類を充たすと爲さんや。仲子が若き者は蚓にして而る後に其の操を充た

○相手により場處によつて其の操をかふ、之を以て操守の類を全うせりといふこと能はず、つまり蚓となりて始めてかくの如き操は全うせられうべし、然しこれ人たる者の爲すべきことにあらず、仲子の如きは毫も稱するに足る者ならざるなり。

す者なり。」

孟子曰はく。離婁の明、公輸子の巧も規矩を以てせざれば方員を成すこと能はず、師曠の聰も六律を以てせざれば五音を正すこと能はず、堯舜の道も仁政を以てせざれば天下を平治すること能はず。

○離婁は古の明目者○公輸子、名は班、魯の人、細工に巧なり○規矩はぶんとまわしとさしがね○方員は四角と圓。  
○師曠は晋の平公の樂長○聰は耳のさときこと○六律は黃鐘、大簇、姑洗、蕤賓、夷則、無射、以て音をふしづけるなり○五音は宮、商、角、徵、羽なり。

今仁心仁聞ありて、而も民其の

○仁聞は人を愛する名聞。

澤を被らず、後世に法るべから

○澤は恩澤、おかけなり。

ざるものは、先王の道を行はざ

○先王の道を本とすべきに、前段に説けるもの、如く、主とする所なきをいふ。

ればなり。故に曰はく、徒善は以

○徒善はたゞ善心あるのみをいふ。

て政を爲すに足らず、徒法は以

○徒法はたゞ善法あるのみをいふ。

て自から行ふこと能はず。詩に

○此詩は詩經大雅假樂の篇○愆は過に同じ○蕝章は先王の禮樂制度

云ふ、愆たず忘れず、舊章に率

をいふ

ひ由ると。先王の法に遵つて過

つ者は未だ之れ有らざるなり。」  
聖人既に目力を竭し、之れに繼  
ぐに規矩準繩を以てせば、以て  
方員平直を爲すこと勝げて用ふ  
べからず。既に耳力を竭し、之  
れに繼ぐに六律を以てせば、五  
音を正すこと勝げて用ふべから  
ず。既に心思を竭し、之れに繼

○準繩はみづもりとすみなは○規  
は圓に、矩は方に、準は平に、繩は直に  
要するなり。

ぐに人に忍びざるの政を以てせ  
ば、すなはち仁天下を覆ふ。故  
に曰はく、高きを爲すは必ず丘  
陵に因る、下きを爲すは必ず川  
澤に因ると。政を爲して先王の  
道に因らずんば智と謂ふべけん  
や。  
是を以て惟仁者のみ宜しく高位

○人に忍びざるの政は仁政なり、た  
ゞ之を以て規矩準繩とすべし。

○日は古人の語。

○因る所あるべきをいふ。

に在るべし。不仁にして高位に在るは、是れ其の惡を衆に播くものなり。

上に道の揆るべきなく、下に法の守るべきものなければ、朝は道を信せず、工は度を信せず。

君子は義を犯し、小人は刑を犯して、國の存する所の者は幸なり。

○揆は度に同じ。

○朝は朝に在る者。

○君子は此にては上位に在る者なり。○小人は下民なり。

○幸は僥倖なり、存せざることが當然なりとの意味。

り。

故に曰はく、城郭完からず兵甲多からざるは、國の災に非るなり。田野辟けず貨財聚まらざるは、國の害に非るなりと。上に禮なく下に學なければ、賊民興りて、喪ぶること日なからむ。詩に曰ふ、天の方に蹶く、然く

○禮なく學なきを以て國家の災害となすべし。

○此詩は詩經大雅板の篇○天の蹶

泄泄たることなかれと。泄泄は猶ほ沓沓のごとし。君に事るに義なく、進退禮なく、言ふことは則ち先王の道に非る者は、猶ほ沓沓のごとし。

故に曰はく、難きを君に責むる、之れを恭と謂ひ、善を陳べて邪を閉づる、之れを敬と謂ひ、吾

くは天運の變動(顛覆)すること○泄々は怠慢の形、群臣安逸に過しをること○沓々も安逸怠慢の状をいふ。

○此語は古人の語なり。  
○難は行ひ難き事を勸むること、即ち仁政をさす。

が君能はずといふ、之れを賊と謂ふと。』

孟子曰はく。規矩は方員の至れるものなり、聖人は人倫の至れるものなり。

君たらんと欲せば君の道を盡し、臣たらんと欲せば臣の道を盡す、二つの者皆堯舜に法らんのみ。

○聖人は人道の至極に達したる人なり。

○君臣の道は専ら堯舜を宗とすべし。

舜の堯に事ふる所以を以て君に事へざるは、其の君を敬せざるものなり、堯の民を治むる所以を以て民を治めざるは、其の民を賊そとふ者なり。

孔子曰はく、道は二つ、仁と不仁とのみと。

其の民を暴そとふこと甚だしければ

則ち身弑いせられ國亡ぶ、甚だしからざれば則ち身危かたく國削けつらる、之れを名づけて幽厲と曰ふ。孝子慈孫と雖も、百世改むること能はざるなり。  
詩に云ふ、股鑿いんかん遠とほからず、夏后の世に在りと、此れを之れ謂ふなり。」

○幽は暗、厲は虐、共に悪き意味の字なり。

○百世は百世を経るとも、の意味○改むは其の悪名を改むること。

○此詩は詩經大雅蕩の篇○股鑿は股のかんがむべき戒○夏后は桀王。

孟子曰はく。三代の天下を得るや仁を以てす、其の天下を失ふや不仁を以てす。國の廢興存亡する所以のものも亦然り。

天子不仁なれば四海を保たず、諸侯不仁なれば社稷を保たず、卿大夫不仁なれば宗廟を保たず、士庶人不仁なれば四體を保

○三代は夏と殷と周。

○社稷は五穀を祭る處。

○宗廟は先祖を祭る處。

○天下亡び、國亡び、家亡び、身亡ぶをいふ。

たず。

今死亡を惡みて、不仁を樂む、是れ醉を惡みて酒を強ゆるがごとし。」

孟子曰はく。人を愛して親しまずんば其の仁に反れ、人を治めて治まらずんば其の智に反れ、人を禮して答へずんば其の敬に

○古今世人の狀態大抵此の如し、鑒みざるべけんや。

○反は反省してますますくつとめ行ふこと。

反れ、行うて得ざるものあらば  
皆これを已れに求めよ。其の身  
正しければ天下之れに歸す。

詩に云ふ、永く言命に配すれば、  
自から多福を求めむ。」

孟子曰はく。人恒に言へること  
あり、皆曰はく、天下國家と。

天下の本は國にあり、國の本は

○歸は歸服すること。

○此詩前(一四二頁)に出づ、

○天下國家は末なり、すべての本は

家にあり、家の本は身に在り。」

孟子曰はく、政を爲すは難から  
ず、罪を巨室に得ざるのみ。巨  
室の慕ふ所は一國之れを慕ふ。  
故に沛然として徳教四海に溢  
る。」

孟子曰はく。天下道あれば、小  
徳は大徳に役せられ、小賢は大

實に吾身なり、故に須らく吾身を正  
しうせざるべからず。

○巨室は大家、世々忠節を抜んで、  
勳功ある家柄をいふ。

○沛然はあふれみつる形。

○役は使はるゝこと。



賢に役せらる。天下道なければ、小は大に役せられ、弱は強に役せらる。斯の二つの者は天なり、天に順ふ者は存し、天に逆ふ者は亡ぶ。

齊の景公曰はく、既に令するこ  
と能はず、又命を受けずんば、  
是れ物を絶つなりと。涕出で、

○天なりは自然の法則なりとの意味。

○令は命令を出して人を使ふこと  
○命は人の命令なり○物を絶つは  
他との交際を絶つこと、主に國交は  
ついでいへり○齊衰へて呉の強大  
に畏れたるものなり○女はいやいや  
ながら呉の命のまゝに其の女を

呉に女はせり。

今や小國は大國を師として而も  
命を受くることを恥づ、是れ猶  
ほ弟子にして命を先師に受くる  
を恥づるがごとし。如し之れを  
恥ぢば文王を師とするに若くは  
なし。文王を師とせば、大國は  
五年、小國は七年にして、必ず

嫁せしめたり。

○他國に恥づることは理由なきこと  
となれども人情の然る所致方なし。

○政を爲さむは正道を行ふこと。

政を天下に爲さむ。

詩に云ふ、商の孫子、其の麗億のみならず、上帝既に命じ、侯れ周に服す、天命常なし、殷士膚敏、裸して京に將ふと。

孔子曰はく、仁は衆を爲すべからずと。夫れ國君仁を好めば天下に敵なし。

○此詩は詩經大雅文王の篇○孫子は詩の音調にて子孫を逆にせるなり○麗は數なり○侯は是なり○殷士は殷の遺臣○膚敏膚は大又美敏は慧又達才智の美にして達なること○裸は芳香ある酒を地に灌ぎて祭ること○京に將ふは周王の祭を助くるをいふ。

○衆を以てすべからずは多勢の者を以ても當るべからざるをいふ。

今や天下に敵なからんことを欲して而も仁を以てせず、是れ猶ほ熱を執つて以て濯はざるがごとし。詩に云ふ、誰か能く熱を執つて、逝に以て濯はざらむと。」孟子曰はく、不仁者は與に言ふべけんや。其の危きに安んじて、其の菑を利とし、其の亡ぶる所

○濯は水にて洗ふこと。

○此詩は詩經大雅桑柔の篇。○愚かなることなをいふ。

○言ふは善事を語り合ふこと。

○其は自身についていふ。

○菑は災に同じ。

○實に愚の極なり。

以のものを樂む。不仁にして與に言ふべくんば、則ち何ぞ國を亡ぼし家を敗ることか之れあらん。

孺子あり、歌うて曰はく、滄浪の水清まば、以て我が纓を濯ふべし、滄浪の水濁らば以て我が足を濯ふべしと。孔子曰はく、

○不仁者も能く善事を言ひ合は、決して國家を亡ぼすことなかるべしとなり。

○孺子は童子。  
○滄浪は漢水の下流の名、楚國にあり  
○纓は冠の首にかける紐なり。

小子之れを聽けよ、清まば斯に纓を濯ひ、濁らば斯に足を濯ふと。自から之れを取るなりと。夫れ人は必ず自から侮つて然る後人之れを侮る、家必ず自から毀ちて而る後人之れを毀つ、國必ず自から伐ちて而る後人之れを伐つ。

○同一の川の水にて或時は首につけるものを洗ひ或時は足を洗ふこと非常の相違なり、之は全く水の清濁によつて起ることにして、即ち水自ら招き取りたるなり。

○人にして、家にして、國にして、皆自ら招くなり、謹まざるべけんや。

太甲に曰はく、天の作せる孽は猶ほ違ちがくべし、自から作せる孽は活いくべからざるなりと。」

孟子曰はく。桀・紂の天下を失ふや其の民を失ふなり、其の民を失ふは其の心を失ふなり。天下を得るに道あり、其の民を得れば斯こゝに天下を得。其の民を得る

○太甲は書經の篇の名、前(一四二頁)に出づ。

○天下を治むるの方法は主として人民の心を得ることにあるなり。

に道あり、其の心を得れば斯こゝに民を得。其の心を得るに道あり、欲する所は之れがために之れを

聚あめ、惡にくむ所は施あすことなきのみ。

民の仁に歸するや、猶ほ水の下ひくまに就つき、獸の曠ひんきに走はるがごとし。故に淵ふちのために魚を毆かる者は獺たつ

○心を得る方法は好む所を聚め興へて惡む所を捨て去るにあるなり。

○曠は曠き野原なり。

○毆は驅かに同じ。

なり、叢くさけらのために爵すゐめを毆かる者は  
鷓せんなり、湯・武のために民を毆かる  
者は桀と紂となり。

今天下の君仁を好む者あらば、  
則ち諸侯皆之れがために毆からん、  
王たることなからんと欲すと雖  
も得べからざるなり。

今の王たらんと欲する者は、猶

○ 獺はかほをそなり ○ 爵は雀に同  
じ。

○ 鷓ははいたかなり。

○ 民を毆るは湯王武王の方へ赴か  
しめたること。

○ 毆らんは人民についていふ。

ほ七年の病に、三年の艾よもぎを求む  
るがごとし、苟くも畜たくはへざらし  
めば身を終まるまで得ず。苟くも  
仁に志さずんば身を終まるまで憂  
辱せられて、以て死亡に陥らむ。  
詩に云ふ、其れ何ぞ能く淑よから  
ん、載すなはち胥あいとも及おほに溺おぼると。此れを  
之れ謂ふなり。」

○ 艾ガイは草、よもぎ又はもぐさといふ、  
灸火に用ひ、乾くこと久しくして古  
きものをきゝめ多しとす、然し七年  
の病を治ナホすことは望むべからざる  
なり ○ 畜は蓄に同じ、艾をたくはふ  
ること ○ 得ずは三年を経たる艾を  
もえずとなり。

○ 此詩は詩經大雅桑柔の篇 ○ 淑は  
善なり ○ 詩の意味は君臣共に善政  
を爲すことなく相共に禍に陥ると  
なり。

○ 仁政を爲すべきことをいふ。

られずんば、民得て治むべからず。上に獲らるゝに道あり、友に信ぜられずんば上に獲られず。友に信ぜらるゝに道あり、親に事へて悦ばれずんば友に信ぜられず。親を悦ばすに道あり、身に反みて誠ならずんば親に悦ばれず。身を誠にするに道あり、

○誠は眞實なり。

善に明かならずんば其の身に誠ならず。

○善に明かなるは明かに善の善たることを知了すること。

是故に誠は天の道なり、誠を思ふは人の道なり、至誠にして動かざる者は未だ之あらざるなり、誠ならずして未だ能く動く者あらざるなり。」

○天の道は自然の法則を稱す○思ふは自然の法則の眞實なることを標準として踐み行ふこと。  
○動は活動すること、親に悦ばれ、友に信ぜられ、上に獲らるゝこと等是れなり。  
○此語子思の「中庸」による。

孟子曰はく。伯夷紂を辟けて北

孟子曰はく、自から暴ふ者は與に言ふことあるべからず、自から棄つる者は與に爲すことあるべからず。言禮義を非る、之れを自暴と謂ふ、吾が身仁に居り義に由ること能はざる、之れを自棄と謂ふ。

仁は人の安宅なり、義は人の正

○暴は害に同じ。

○言ふは道を語ること。

○棄は墮落すること。自暴自棄の熟語あり○爲は道を行ふこと。

○安宅は心の落付處○正路は行ふに正しき道筋。

路なり。安宅を曠うして居らず、正路を舍いて由らず、哀いかな。』孟子曰はく。道は邇きに在り、而もこれを遠きに求む、事は易きに在り、而もこれを難きに求む。人人其の親を親とし、其の長を長として、天下平かなり。』孟子曰はく。下位に居て上に獲

○舍はすて、顧みざること○哀はあはれむべしとの意味。

○求むるは世の人についていふ。

○親を愛し長を敬ふこと、是れ道なり、是れ事なり、誠に近易なり。

○上に獲るは君主に信任せらるること。

られずんば、民得て治むべからず。上に獲らるゝに道あり、友に信ぜられずんば上に獲られず。友に信ぜらるゝに道あり、親に事へて悦ばれずんば友に信ぜられず。親を悦ばすに道あり、身に反みて誠ならずんば親に悦ばれず。身を誠にするに道あり、

○誠は眞實なり。

善に明かならずんば其の身に誠ならず。

○善に明かなるは明かに善の善たることを知了すること。

是故に誠は天の道なり、誠を思ふは人の道なり、至誠にして動かざる者は未だ之あらざるなり、誠ならずして未だ能く動く者あらざるなり。」

○天の道は自然の法則を稱す○思ふは自然の法則の眞實なることを標準として踐み行ふこと。  
○動は活動すること、親に悦ばれ、友に信ぜられ、上に獲らるゝこと等是れなり。  
○此語子思の「中庸」による。

孟子曰はく。伯夷紂を辟けて北



海の濱はらに居る、文王の作興するを聞いて曰はく、盍なぞ歸せざらんや、吾われ西伯は善く老を養ふ者なりと聞くと。太公紂を辟けて東海の濱に居る、文王の作興するを聞いて曰はく、盍なぞ歸せざらんや、吾われ西伯は善く老を養ふ者なりと聞く。

○作興は起ちて王道を興すこと。

○西伯は文王の稱、四方諸侯の長たるをいふ。

○太公は太公望なり、姓は姜、氏は呂、名は尚。

二老は天下の大老なり、而も之れに歸せり、是れ天下の父之れに歸するなり。天下の父之れに歸すれば、其の子焉いづくにか往ゆかん。諸侯文王の政を行ふ者あらば、七年の内必ず政を天下に爲さむ。」  
孟子曰はく。求や季氏の宰と爲

○大老は大徳ある老人を稱す、伯夷と太公なり○之は文王をさす。

○父は即ち大老なり。

○子たる人民も亦文王に歸すべし。

○政を爲さむは仁政を行ふこと。

○求は孔子の弟子、冉求○季氏は魯の卿、季康子なり○宰は執政なり。

つて、能く其の徳を改むることなく、而も粟を賦すること他日に倍せり。孔子曰はく、求は我が徒に非るなり、小子鼓を鳴らして之れを攻めて可なりと。此れに由つて之れを觀れば、君仁政を行はずして之れを富ますは、皆孔子に棄てらるゝ者なり。況

○賦は割付けて取ること。

○孔子大いに冉求の不徳不仁を攻められたるなり。

んや之れがために強戦し、地を争うて以て戦ひ、人を殺して野に盈て、城を争うて以て戦ひ、人を殺して城に盈つるに於てをや。此れいはゆる土地を率ゐて人の肉を食はしむ、罪死に容れられず。故に善く戦ふ者は上刑に服す、

○強戦ははげしき戦争を起すこと。

○容れられずとは其の罪の大なること死刑も猶足らざるをいふ。

○善戦者は孫臏、吳起の徒○上刑は死刑。

諸侯を連ぬる者は之れに次ぐ、  
草萊を辟き土地を任ずる者は之  
れに次ぐ。」

孟子曰はく。人に存するものは  
眸子より良なるはなし。眸子は  
其の悪を掩ふこと能はず。胸中  
正しければ則ち眸子瞭かなり、  
胸中正しからざれば則ち眸子眊

- 連は連結即ち合縦すること、蘇秦、張儀の徒之を爲して、而も終を全うせざりき。
- 草萊は荒蕪の地、萊は雜草○辟は開墾すること、墾は開き耕すこと○土地を任ずるは土地を民に分ち興へて耕作に任せしむること。李悝、商鞅の徒之を爲せり、皆死刑に當ると爲す。
- 眸子はひとみ○良は眞實。
- 掩はおほひかくすこと。
- 眊は不明たること。

し。其の言を聽いて其の眸子を  
観るときは、人焉んぞ度さんや。」  
孟子曰はく。恭者は人を侮らず、  
儉者は人を奪はず。人を侮り奪  
ふ者は惟順ならざらんことを恐  
る、惡んぞ恭儉と爲すことを得  
ん。恭儉は豈聲音笑貌を以て爲  
すべけんや。」

- 眸子は正しく人の心をうつすものなり。
- 度すは其心をかくすこと。
- 儉者は清廉なる者をいふ○奪はずば人の物についていふ。
- 恭儉は外形によらず内心にあり。

淳于髡じゆんくわん曰はく。男女授け受くるに親かみからせざるは禮か。

孟子曰はく。禮なり。

曰はく、嫂溺さうにほるゝときは、則ち之れを援あひよくに手を以てせんか。

曰はく。嫂溺さうにほるゝとき、援あひかざるは、是れ豺狼なり。男女授け

○淳于髡は齊の辯論家なり、淳于は姓、髡は名○授受は物を授け又物を受くること。

○援は引いて救ひ上げること。

○豺狼は残忍なるにいふ。

受くるに親からせざるは禮なり。

嫂溺さうにほるゝとき之れを援あひくに手を

以てするは權なり。

曰はく。今天下溺る、夫子の

援かざるは何ぞや。

曰はく。天下溺るゝときは之れを援あひくに道を以てし、嫂溺さうにほるゝときは之れを援あひくに手を以てす。

○禮は常經、正當の道なり。

○權は、はかり適宜に物の輕重をはかるもの、即ち場合によつて變化あるをいふ。

○天下を救ふには手にてする能はず、必ず道を以てすべし。

子手にて天下を援かんと欲する  
か。」

公孫丑曰はく。君子の子に教  
へざるは何ぞや。

孟子曰はく。勢ひ行はれざれば  
なり。教ふる者は必ず正を以て  
す。正を以てして行はれずんば  
之れに繼ぐに怒りを以てす。之

○ 堯舜を始め、孔子等皆其子に教ふ  
ることなきを疑ふなり。

○ 勢は自然の情勢なり。

○ 父は子に對じて怒り易し。

れに繼ぐに怒りを以てすれば則  
ち反つて夷ふ。夫子我に教ふる  
に正を以てすれども、夫子未だ  
正に出でざれば、則ち是れ父子  
相夷ふなり、夫子相夷へば則ち  
悪し。  
古は子を易へて之れを教ふ、父  
子の間善を責めず、善を責むれ

○ 夷は傷に同じ ○ 夫子は父をいふ。

○ 父正を教へて而も自身に正を行  
はざれば、子之れを信ぜず、遂に相傷  
ふに至る、況んや人は實際家庭に於  
ける行の正をうることに難きに於て  
をや。

○ 父子の間は恩愛を主として、責む  
ることなし。

ば則ち離る、離るれば則ち不祥しよくこれより大なるはなし。」

○不祥は不吉なり。

孟子曰はく。事つかふることに孰いづれをか大なりとす、親に事ふるを大なりとす。守ること孰れをか大なりとす、身を守るを大なりとす。其の身を失はずして能く其の親に事ふる者は吾之れを聞け

○身を守るに親に事ふるとは相一致するものなり。

り、其の身を失うて能く其の親に事ふるものは吾未だ之れを聞かざるなり。孰れか事ふるとせざらん、親に事ふるは事ふるの本なり。孰れか守るとせざらん、身を守るは守るの本なり。

曾子曾せき皙を養ふに必ず酒肉あり、

○曾皙は曾參の父。

將に徹せんとするや、必ず與へん所を請ふ。餘りありやと問へば、必ず曰はく有り。曾皙死す。曾元曾子を養ふに必ず酒肉あり。將に徹せんとするも、與へん所を請はず。餘りありやと問へば、曰はく、亡し、將に以て復進めんとするなり。此れい

○徹は取り去ること、徹に同じ○與は父が愛する所の兒孫に與ふること。

○問は父が問ふなり。

○有は兒孫に與ふべき餘りあるをいふ。

○曾元は曾子の子。

○兒孫に與ふるや否やを問はざるなり。  
○進めんは父に對していふ。

はゆる口體を養ふものなり、曾子の若きは則ち志を養ふと謂ふべし。親に事ふるに曾子の若くする者は可なり。」

孟子曰はく。人は與に適むるに足らざるなり。政は問るに足らざるなり。惟大人は能く君の心の非を格すことを爲す。君仁な

○口體はたゞ父の口に適し體を養ふものを進むるのみ、其の心情(兒孫を愛して之に分ち與へたき志)を顧みざるものなり。

○曾子の若く父の心情をも養ふべし。

○適は臆に同じ、責むること○何人も責め合ふべからず、人によるべしとなり。  
○問は非難すること○政も相手によるべきことをいふ。  
○大人は大徳ある人。

れば仁ならざるはなく、君義なれば義ならざるはなく、君正しければ正しからざるはなし。一たび君を正せば、すなはち國定まる。」

孟子曰はく。虞らざるの譽あり、全きを求むるの毀あり。」  
孟子曰はく。人の其の言を易り

○格は正に同じ○仁ならざるなしは國中のものについていふ義、正においても亦同じ。

○虞らずは意外といふに同じ。其のいはれなくして來ること。  
○全を求むとは毀りをなくせんと務むること○世の毀譽はあてにならぬものなり。  
○易はかるくしくすること。

するは、責なきがゆへのみ。」

孟子曰はく。人の患は、好んで人の師となるに在り。」

樂正子子敖に従つて齊に之く。

樂正子孟子を見る。

孟子曰はく。子も亦來つて我を見るか。

曰はく。先生何爲れぞ此の言

○責は之を實行する責任を引受けること。

○人の師となれば自ら足れりとして又進まず、之れ其人のために患ふべし。

○子敖は齊王の嬖臣王穉の字なり。



を出すや。

曰はく。子來りしは幾日ぞ。

曰はく。昔日。

曰はく。昔しなれば則ち我此の言を出すも亦宜ならずや。

曰はく。舍館未だ定まらず。

曰はく。子之れを聞けるか。舍館定まりて然る後長者に見ゆる

○昔日は數日前なりとの意味。

○舍館は宿處なり。

ことを求むるか。

曰はく。克罪あり。」

孟子樂正子に謂つて曰はく。子の子敖に従つて來るは徒舖啜するのみ、我意はざりき、子古の道を學んで而も以て舖啜せんとは。」

孟子曰はく。不孝に三あり、後

○克は樂正子の名○罪は早速訪問せざりし無禮をいふ。

○舖は食ふこと啜は飲むこと。

○三不孝は阿れり從ひて不義に陥らしむること一家貧しく親老いた

なきを大なりとす。舜告げずして娶りしは後なきがためなり、君子は以て猶ほ告ぐるがごとしと爲す。」

孟子曰はく。仁の實は親に事ふること是れなり、義の實は兄に従ふこと是れなり、智の實は斯の二者を知つて去らざること

れども祿仕せざること二、娶らずして子なく先祖の祀を絶つこと三、○後なきは子孫なきこと。

○告るが如しとは舜の兩親は不明の人なれば告るとも承諾せず、然らば後なきに至り、大不孝となる、故に告げざると却て孝道を余うする所以なり、其精神に於てはつまり告ると同様なり。

○仁は孝を本とし、義は敬を本とす。

れなり、禮の實は斯の二者を節

文すること是れなり、樂の實は

斯の二者を樂しむことなり。樂

めば則ち生ず、生ずれば則ち惡

んぞ已むべけん。惡んぞ已むべ

くんば、則ち足の之れを踏み手

の之れを舞ふを知らざるなり。」

孟子曰はく。天下大いに悦んで

○節文はきまりをつけ又うるはしくすること。

○生ずは孝敬の心、自然に發生すること。

○已むべけんは、發動して止まることなく、勢の盛んなるをいふ。

○愉悅の情極まりなき有様なり。

將に己れに歸せんとす、天下の悦んで己れに歸するを視ること、猶ほ草芥のごとし、惟舜を然りと爲す。親に得られざれば以て人と爲すべからず、親に順ならざれば以て子と爲すべからず。舜親に事ふるの道を盡して、瞽瞍を底す、瞽瞍を底して天

○草芥の如しとは草又は芥アケダを見るが如く、少しも氣にかけぬこと○舜は天下を得ることを氣にかけず、ただ人たり子たるの道を行ふことのみ切すら心懸くるなり。  
○得られずは親の心になはざること。

○瞽瞍は舜の父の名○豫は悦樂なり○底は致に同じ○天下化すは天下の子たる者舜の徳に化せられて孝道を勵むこと。

下化し、瞽瞍を底して天下の父子たる者定まる、此れを之れ大孝と謂ふ。」

孟子曰はく。舜は諸馮トに生まれ、負夏に遷り、鳴條に卒る、東夷の人なり。文王は岐周に生まれ、畢郢ヒに卒る、西夷の人なり。地の相去ること千有餘里、世の相

○父子定まるは父は慈なるべく子は孝なるべしといふ道理の確定すること。

○諸馮、負夏、鳴條、皆地名なり、其中諸馮は東夷と稱する地方に在り、故に舜を東夷の人といふ。

○岐周、畢郢も地名、岐周は西夷にあり、故に文王を西夷の人といふ。

○地の相去る事は舜と文王との生地の隔たること。

後るゝこと千有餘歳、志を得て  
中國に行ふこと符節を合するが  
若し、先聖後聖其の揆一なり。」

子産鄭國の政を聽く。其の乘  
輿を以て人を漆洧に濟せり。

孟子曰はく。惠にして、政を爲  
すことを知らず。歳の十一月に  
徒杠成り、十二月に輿梁成らば、

○符節は玉に文字をほりつけて中  
分して、わりふとなし、以て信とす。

○揆は度又は仕方。

○子産は鄭の大夫公孫僑なり○乘  
輿は子産の乗れるこし。

○漆洧は共に河の名。

○惠はたいめぐみぶかきこと、然し  
これ政にあらず。

○徒杠は徒歩者を渡す小橋○輿梁  
は輿を渡す大橋。

民未だ渉ることを病へず。君子

其の政を平かにせば、行くに人  
を辟くも可なり、焉んぞ人人に

して之れを濟すことを得ん。故  
に政を爲す者は、人毎に之れを  
悦ばせんには、日も亦足らず。」

孟子齊の宣王に告げて曰はく。  
君の臣を視ること手足の如くす

○平は公平にゆきわたらすこと。

○辟くは避けしむること、必ずしも  
濟すに及ばざるなり。

○人民を一悦ばせんとせば、日  
數不足にして、到底出來ざるなり。

○こゝは君臣互に相思ひ相頼る様  
をいふ。